
無言の歌よ、響けあの日の大空に

ぽて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無言の歌よ、響けあの日の大空に

【Nコード】

N9847G

【作者名】

ぼて

【あらすじ】

高校の卒業アルバムに挟まれた一枚のメモ。そこにはまるで覚えのない少女の名前が残されていた。果たしてこの少女は一体誰なのか？

第一部

1

ここに一枚のメモがある。どうやら手帳の一頁のようだ。相当慌てていたのだろうか、勢いよく破った上に、乱れた文字が次のように並んでいる。

「篠宮麻希が好き。麻希を忘れない、忘れたくない」

芹沢雅成は、メモを手にとって、しばらくその意味を考えた。

鉛筆で書かれたこれらの文字は、長年の歳月を経て、滲んでしまっている。

それでもこれは、自分が若い頃書いた文字である。疑う余地はない。

雅成はこの短い文章を反芻してみた。ついには声に出して読んでみた。

しかし今となつては、この文章が一体何を意味しているのか、さっぱり分からないのだ。

どれだけ過去をたぐり寄せても、この篠宮麻希という人物にまるで心当たりがないのである。

この人物は、一体誰なのか。

文面通りに、これが自分の恋した女性の名前だとしたら、たとえ今でも忘れるはずがない。しかし篠宮麻希という名前は、自分の心に何も訴えかけてこないのだ。

ひょっとして、これは芸能人か、あるいは小説、映画の登場人物ではないだろうか。そんなことをふと考えてみる。

いや、そんな筈はない。雅成は直ちに否定する。

そんな名前を紙に残しておく必要がどこにあるというのか。

それに、「忘れない、忘れたくない」という箇所である。ここには、何か切羽詰まった状況を感じる。これは架空の人物なんかではない。やはり身近にいた人物と考えるのが自然である。

そうなる、どうしてそんな大切な人を忘れてしまっているのか、それが分からない。

結局、謎が堂々巡りするだけで、答えには辿り着けそうもなかった。

雅成は、明日に高校の同窓会を控えていた。

それで押し入れの中から卒業アルバムを引っ張り出してきた。十年ぶりに再会する仲間の顔と名前を確認しておこうと思ったのである。

アルバムの表紙を開いた途端、ひらひらと木の葉のように落ちたのが、このメモだった。

高校のアルバムに挟んであったからには、やはり高校時代の知り合いの名前と見るべきか。

そう考えて、雅成はアルバムを最初から最後まで、穴が開くほど見返した。

しかし、ついに篠宮麻希という名前に出くわすことはなかった。

彼女はどうかやら公式のアルバムにさえ、見放されたらしい。

それとも先輩か後輩の名前だろうか。それは今、ここでは調べようがない。明日、同窓会に出席した人に、心当たりがないか当たってみようか、とも思う。

それにしても、考えれば考えるほど、次第に気持ち悪くなってきた。名前すら忘れてしまう女性を好きだと言っている自分が、ひどくいい加減で、腹立たしく感じられるのだ。

突然、部屋の電話が鳴り響いた。

手から卒業アルバムを解放して、慌てて受話器を取った。

「もしもし、高校のクラス委員だった、谷山です」

受話器の向こうは、やや控えめな声だった。

「ああ、どうも、こんばんは」

「お久しぶりです、芹沢君。懐かしいね」

谷山は急に馴れ馴れしい口調に切り替わった。それは彼らしい演出のように思われた。

谷山は、成績優秀でずっとクラス代表を務め上げ、スポーツも万能だった記憶がある。そのため女子からは常に人気が高かった。今もその面影を残しているのだろうか。

「最終確認で電話したんだ。明日は、芹沢君は来てくれるんだろ？」

谷山は早速そんな事務的な話を切り出した。これが、この電話の真の目的なのだろう。

「はい、もちろん行きます。夕方六時に高校だったよね？」

「そう、グラウンドが駐車場になっているから、車はそっちに入れていいから」

今回の同窓会は母校の体育館で行われる。

実は来年、この体育館が老朽化を理由に、建て替えられることになっていた。そのため、消えゆく体育館を会場にしようという話が持ち上がったのである。

体育館に生徒、恩師が一同に会し、料理もそこへ運ばれる手筈になっているらしい。

「それじゃ、明日は遅れずに頼むよ」

谷山は最後にそう付け加えて、電話を切りそうになった。

雅成は慌てて、

「あ、ちよつと待って、聞きたいことがあるんだけど」と踏みとどまらせた。

「うん？ どうした？ 二次会のことかい？」

「いや、違うんだ。谷山君は、篠宮麻希って名前に聞き覚えがあるかい？」

「シノミヤ？」

怪訝そうな声が、受話器から伝わる。

「二宮じゃなくて？」

「いや、篠宮麻希っていうんだけど」

お互いが受話器を手にしたまま、無言になった。谷山はしばらく考えているようだった。

「そんな名前は名簿にないけど」

「転校生とか、そういう子は？」

雅成はなおも食い下がった。

「いや、そういうのも全部名簿には入っているから、間違いないよ」

「そうか」

雅成には、それほど失望感は湧いていなかった。こちらも卒業アルバムで確認済みである。あくまで念のため、という程度だった。

「上級生か下級生なら、どうだろう？ 知らないかい？」

「いや、私の知る範囲では、そんな名前はなかったと思うんだが」人脈が広がった谷山が言うのだから、間違いはないだろう。

それでは篠宮麻希というのは一体、どこの誰なのか。謎は謎のままである。

「その篠宮つてのは、どういう子なんだい？」

今度は谷山が逆襲してきた。雅成は返答に窮した。まさか例のメモの話をするわけにもいかない。

「いや、いいんだ、こっちの勘違いだな、多分」

「そうか、じゃ、明日楽しみに待ってるから」

そこで谷山は急に思い出したように、

「ところで、まだギターは弾いているのかい？」

と訊いた。

「ギター？」

雅成は一瞬、何の話か分からなくて、聞き返した。

「ギターだよ、ほら、文化祭で弾き語りしただろ？」

「ああ、あれか」

雅成は今、やつと思い出した。確かそんなことがあった。

「今もやつているのかい？」

「いや、全然」

「そうか、残念だな。もし今、腕を上げているなら、明日体育館で弾いてもらおうと思ってさ」

「いや、あれからまったくやってないから無理だよ」

雅成はきっぱりと言った。

谷山は、快活に笑うと、

「それじゃ、明日はよろしくな」

と言って、電話を切った。

文化祭でギターを弾いたことなど、今の今まで忘れていた。体育館に特設ステージを設けて、学生コンサートが開かれた。歌や楽器に自信のある連中が、次から次へとステージで楽曲を披露した。

自分もギターを片手に、そのコンサートに参加したのだった。そう言えば、それほどうまくもないギターを、どうして人前で弾こうと思ったのだろうか。今にしてみれば、不思議である。

当時、確かにギターに興味を持って、独学で練習を始めた記憶がある。しかし、それをコンサートという大舞台で披露するほど、うまくなかった筈である。それに、そもそも自分はそんな活発な性格でもない。

一体どういう経緯で、コンサートに参加することになったのだろうか。

これも今となっては謎である。

しかし谷山は、本人ですらとくに忘れていることを、よく覚えていると感心する。おそらく、彼も同窓会での話題作りのために、当時のイベントのプログラムや写真を前もって見たに違いない。

もしそうなら、明日はそのギターの話がみんなの前で持ち出されそうである。それはそれで少々恥ずかしいな、と思った。

それにしても、谷山は随分と大変である。確かに彼とは同じクラスだったが、そんなに深い付き合いがあったわけではない。それで

も彼は、幹事を務めている以上、当時目立たぬ自分を持ち上げるような話をしなければならぬ。とても自分には務まる仕事ではないと思う。

壁の時計に目をやった。夜の十時を回ったところである。おそらくこの後も、谷山はみんなにそんな電話を掛け続けるに違いない。さて、どうやら明日の同窓会には、篠宮麻希が現れないことだけは確かである。名簿に載っていないのだから、それも当然である。

明日クラスメートの何人かに篠宮麻希という名前を訊いてみようと思う。谷山ほどの人物が知らないようでは、おそらく期待薄ではあるが、何か分かるかもしれない。

篠宮麻希のことはともかく、雅成は、明日の同窓会が楽しみになってきた。

自分は、決して人から注目される存在ではなかったが、それでも今、高校時代の懐かしい日々が蘇ってくる。

そんな思い出に身をゆだねている内に、雅成はいつしか、その不思議なメモの存在を忘れてしまっていた。

2

季節は春を迎えていた。学校に続く坂道には、桜の花びらが無数に乱れ飛んでいる。それは無事入学を果たした新入生に、拍手を送っているかのようだった。

時折吹く風は少々冷たいが、空は抜けるように青く、新たな出会いを演出するに相応しい風景だった。

そんな坂道を、高校二年の芹沢雅成は無感動に登っていた。目の前には去年と同じ光景が広がっている。

彼の周りには、慣れない制服を身にまとった後輩たちが、どこか緊張した面持ちで学校を目指している。自分も去年はこんなふうだったのか、と考えた。

新入生らは脇目も振らず、ただまっすぐに歩いていく。希望の中にも、不安が大きく影を落としているのか、心にゆとりが感じられない。彼らは、ただゴールまで突き進む競歩の選手のようなのである。

さすがに上級生は、こんな風景を目の前にしても、特に気分が高揚することはない。あるのは、日々の惰性と適度な怠惰だけである。友人と並んで登校する上級生は、どうしても歩くのが遅くなる。楽しい時間を少しでも長く共有しようと考えているのだろう。

雅成はそんな彼らを縫うように、先を急いだ。特に慌てる理由もないが、孤独であることが彼の歩みに速度を与える。

何も自分に限ったことではない。一人寂しく登校する者は、その場を早く去りたいのか、どんどん歩いていく。その歩き方は、どこか新入生と共通するものがある。

すぐ目の前に、少女の後ろ姿があつた。長い髪を後ろで束ねている。

彼女は一人でいるにもかかわらず、歩くのが遅かった。まるで周囲を確かめるように、ゆっくり進んでいく。

不思議な少女だった。

明らかに新入生だと思われた。坂道を埋め尽すほどの桜に、圧倒されているのだろうか。

それにしても彼女の歩きは遅すぎる。まるで小学生が、通学路で目にする物全てに心を奪われて、立ち止まっては少し進む、そんな感じなのである。

雅成はそんな彼女をあつさりと追い越した。同じ高校生でありながら、まるで勝負にならなかった。

少し先に進んでから、何気なく後ろを振り返った。慌ただしい朝に、ふらふら歩いている新入生の顔を、ちよつと拝んでやろうという気持ちだった。

彼女の姿は遥か後方になっていた。

意外にも大人びた、整った顔つきをしていた。自分よりも年上に見える。背はやや高く、すらりと伸びた足がもつれるような動きを

している。

彼女は、舞い降りてくる桜の花びらに、一々気を取られているようだ。後ろから迫ってくる学生たちが、容赦なく彼女を抜き去っていく。

そんな制服の波が、瞬く間に彼女を飲み込んでしまった。

雅成は新しい教室に入った。今日が新学期の初日である。残念なことに、数少ない友人は、誰も同じクラスには入っていないかった。

この日の教室は、一年で最も騒がしい朝を迎えていた。

同じクラスになったことを、身体を弾ませて喜ぶ女子や、隣の教室から激しく出入りする男子らで賑わっている。

そんな教室に収まりきらぬ騒音の中で、雅成だけは静かに指定の座席に腰掛けた。窓に近いこの席から、校庭が見下ろせた。学校を取り囲む桜の木々も見える。

しばらくすると、新しい担任が姿を現した。この頃には、さっきの喧騒が嘘のように消え去っていた。こうやって学年最初のホームルームが始まる。

ふと隣の席に目をやると、そこはまだ、ぽっかりと空間が陣取っていた。教室を見回しても、空席はまさにここだけである。

この席には誰が座るのだろうか。まさか、初日から遅刻してくるのだろうか。

担任もその異変に気がついたようだった。名簿に目を落として、早速出席を取り始めた。

十人ほどの名前が流れた後、突然教室のドアが開け放たれた。その大げさな音は、クラス中の視線を集めるのに十分であった。

少女が立っていた。

足が長く、背の高い彼女は、顔立ちがはっきりしていて、大人の女性を思わせた。口を真一文字に結び、教室の奥を睨むような目をしている。いや、それは窓から差し込む光が眩しくて、目を細めているだけのようにも思えた。

まぎれもなく、今朝、出会った少女だった。まさか自分と同じ二年生だったとは思わなかった。雅成は心底驚いた。

教室は水を打ったように静かだった。誰もが呆気にとられているようであった。

担任に指で示された方向に彼女は歩き始めた。明らかに自分の隣の席に向かっている。そんな彼女の動きを見守っていたら、とうとう最後には、視線がぶつかってしまった。

彼女の目はひどく挑戦的に映った。慌てて目を逸らす。

彼女は初日から遅刻したことを、まるで詫びる様子もなく、無然とした態度で席に着いた。教室のどこかで彼女への悪口ともとれる、囁くような声が漏れた。

机の上に置いた学生鞆には、金属製の可愛いネームタグが付いていた。

そこには「篠宮麻希」という文字が書かれていた。

第二部

3

チャイムが遠くに聞こえていた。午前の授業はこれで終わりの筈である。

雅成は心底救われた気分だった。

授業中、強い睡気と格闘を繰り返していた。気を緩めれば、そこそ泥沼に引きこまれそうな感覚があった。

春休みの間にすっかり生活習慣が乱れてしまった。学校が始まった今でも、平気で夜更かしをしてしまう。

休憩時間になると、かろうじて活力が回復した気になるのだが、授業に戻ると、再び倦怠感が身体を襲う。

新学期が始まってもう一週間が経つというのに、これほど自堕落な自分に、少々嫌気がさした。

しかし隣りにいる篠宮麻希は、そんな自分に何の関心も払っていなかった。

来る日も来る日も、貝のように口を閉ざしたままである。それどころか、自分に一度だって顔を向けたという記憶がない。

確かに彼女は、授業だけは真面目に受けていた。教師の言うことを興味深そうに聞いていた。黒板を見据え、しっかりとノートを取っていた。それは真面目な女の子という印象であった。

彼女はその点においては、立派な高校生であった。雅成には、かすかな敗北感が湧いていた。

しかし自分だって、最初はこんなふうではなかったのだ。

麻希の真剣な姿を目にして、自分も彼女と共に頑張ろう、そんな気でいたのは事実である。

しかし彼女の方が、これほど自分に無関心では、まるで張り合いがなくなってくる。

隣りの席に座ってはいても、二人は見えない壁で分け隔てられている。こちらから大声で呼びかけても、彼女の耳にはまるで届かないのだ。

出会って二日目のことだった。

雅成は篠宮麻希に、話掛けてみようという気になっていた。同じクラスで、席が隣になったのも何かの縁である。

それに長い一日と一緒に過ごすのである。早く仲良くなることは、お互いに得策と思われた。

麻希はチャイムが鳴る寸前に教室に姿を現した。初日と同じく、慌てる様子も見せずに、のんびりと席までやって来た。

「篠宮さん、おはよう」

雅成は思い切って声を掛けた。女子に向かって話すのは緊張する。こんな挨拶一つするのに、随分と心の迷いがあった。しかし勇気を試してみたのだ。

麻希は雅成の顔を盗み見るようにして、

「おはようございます」

と抑揚のない声で返した。

「今日はぎりぎりセーフだね」

雅成が気安くそう言っていると、彼女はそれには応じず、椅子に掛けたそれから長い髪をかき上げるようにして、忙しそうに鞆から勉強道具を取り出し始めた。それはまるで、これ以上話す隙を与えないという意思の表れに思われた。

雅成はそんな彼女の態度に少々腹が立った。折角友好的に声を掛けているのに、彼女は無視を決め込むつもりらしい。

相手がこんなでは、自分が馬鹿らしく思えてくる。

確かに、新学期のクラスは、互いが初対面同士ということもあって、誰もが自己主張を控え、相手との距離を保とうとする。

その結果、教室の中には緊張した空気が流れ、みんな孤独に似た気分を味わうことになる。

もちろんその空気は時間とともに薄らいでいく。現に教室のあちこちで、いち早くその緊張を解くことに成功した者同士の姿も見られる。

しかし篠宮麻希だけは、徹底していた。

彼女は心にシャッターを降ろして、どんな人の気遣いも受け付けないといった、強い意志を持っていた。孤独になることを、自ら選んでいるようだった。

今、クラスは昼食時間を迎えた。

雅成はいつものように弁当箱を取り出すと、一人で食べ始めた。

隣には、髪を肩まで垂らした麻希の横顔があった。

彼女は鞆の中から菓子パン一つと小さな飲み物を取り出した。昼食は毎日決まって、たったそれだけなのである。

麻希はいつも食事には時間をかけている。

何か考え事をしながら、パンをちぎっては口に運ぶ。時に思い出したように、飲み物を口を含む。

一昨日だったか、クラスの女子が、孤独な麻希を見るに見かねて、声を掛けた。

「篠宮さん、あつちで一緒に食べない？」

「はい」

麻希は表情一つ変えることなく、席を立った。

そして女子連中に混じって、昼食を取り始めた。

しかし彼女は、無表情にパンを口に入れていてだけで、周り打ち解けようとはしなかった。友達ができる折角の機会を、自ら逃しているようだった。

賑やかで楽しい筈の昼食が、麻希のその態度で台無しになっていた。

さすがに集まっていた女子たちも、麻希をどう扱えばいいのか、困り果てているようだった。

そんなことがあって、麻希はついに女子からも相手にされなくな

ってしまった。

人付き合いがそれほど上手くない自分にも、友人はいる。

しかし麻希には、一人もいないのだった。

去年同じクラスに友人はできなかったのだろうか。あるいは同じ出身中学の知り合いはいないのだろうか。

今、隣でぼんやりと食事を取っている篠宮麻希は、実は転校生なのではないか、と思えてくる。

でも、それはあり得ない。担任からそんな紹介を受けていないし、本人も校舎の勝手は知っているようである。

篠宮麻希というのは、何とも不思議な存在である。

雅成は、いつしか彼女のことを気に掛けるようになった。どうしてなのだろうか。

自分の中にどこかほんの少し、彼女の気持ちが分かる部分があるような気がする。

彼女は自分の感情をひた隠しにして、平静を保っているが、実は心の中ではもがき苦しんでいる。

そんな心の不整合が、他人に対する冷たい態度となって現れるのではないだろうか。

雅成は教室で麻希と別れた後も、彼女のことを考える瞬間が度々訪れる。

（何か彼女の力になってやれることはないだろうか？）

4

体育の時間だった。

体育館の窓からは、校庭が臨める。激しい雨足が遠くの景色をかき消していた。連日降る雨を、大地は黙々と受け止める。

雅成のクラスと隣のクラスの男女が、一同に集められていた。

六月のこの時期、体育館は肌にまとわりつくほどの湿気が充満し

ていた。じつとしているだけで汗ばんでくる。

この日は体育館の半分を、男子がバスケットボールに、もう半分以上を女子がバレーボールに使用していた。

今、目の前では、クラス対抗のバスケの練習試合が始まっていた。床の上で、シューズが急ブレーキを掛ける音が、絶え間なく響いている。

雅成はコートの外で、ぼんやりと自分の出番を待っているところだった。

運動がそれほど得意でない自分にとって、他人の試合を見学するという時間は実にありがたい。ここは女子の目もある。自分の格好悪いところを晒したくはなかった。

雅成は、何気なく隣のバレーコートに目をやった。

女子もクラス同士で試合をしているようである。こちらと同じく、試合に出ていない生徒が、隅の方でその行方を見守っている。

雅成は、ちよつと興味が湧いて、篠宮麻希の姿を探してみた。

それほど苦勞することもなく、彼女が目映った。

今、ちよつと手前のコートに入っている。彼女は足が長く、身長が高いだけに、頼もしいバレー選手のようなのである。しかし身体の構え方がどこかぎこちなく、スポーツはあまり得意そうではない、と直感した。

今、相手のコートから強いサーブが繰り出された。体育館の空気を切り裂くような音とともに、白いボールが鋭角に飛び込んできた。それは麻希の身体にたちまち吸い込まれた。

突然襲いかかったボールの勢いに、麻希は身体を動かすことすらできなかった。不用意に突き出した手に当たったボールは、彼女の顔を強打したようだった。身体が二つに折れ、床に崩れ落ちた。すかさず相手のクラスの女子から笑いが起こった。

サーブを見事に決めた女子は、戻ってきたボールを自由自在に操っていた。自分のプレイに何の疑いもないようだった。どうやら相当にバレーの経験を積んだ人物を思わせた。

麻希はのろのろと身体を起こした。少し頭を振るようにして、それから鼻の辺りを手で押さえた。そしてネット越しに、相手を睨みつけた。しかしわずかに足が震えているようだった。

さっきのサーバーが、控えの女子に、目で何か合図を送ったようだった。それから二度目のサーブを打ち込んだ。今度も体育館が震えるほどの激しい音がした。

白いボールはまたもや麻希を襲う。今度は足をかすめて、思わずバランスを失う。長い髪が助けを求めるように左右に揺れて、床に尻餅をついた。隣のクラスからは歓声が沸いた。

そこで笛が鳴った。

教師が、不格好に足を投げ出す麻希に駆け寄った。そこでメンバーが交代になった。麻希は右足をかばうようにして、コートの外へ出ていった。

「あれは、わざとだな」

雅成のすぐ近くで、誰かの声がした。気がつくと、周りの男子の視線は、みんなバレーの方に吸い寄せられていた。

「あのサーブは俺たちでも取れないよ。あいつ、バレー部の副部長なんだ」

「狙い撃ちつてやつか」

雅成の知らない男子がそう言った。

やはりそうか。あのサーブは悪意に満ちていた。みんなの前で麻希に失態を演じさせ、それを笑いものにしようという意図が感じられた。

どうしてそんなことをするのか。

確かに麻希は、人と付き合いのできない女かもしれない。しかしだからといって、彼女を非難する権利は誰にもない。彼女だって自分の意志で動いている。それを他人が矯正する立場にはないし、またその必要もない。

雅成には、公開処刑という言葉が頭をよぎった。

こんなやり方で麻希を苦しめるのは、それは卑怯というものである。

あのバレー部員を始め、こんな馬鹿げたことを企てた女子たちが心底憎かった。

「おい、お前ら。どっち見てるんだ」
体育教師の怒鳴り声が響き渡った。

更衣室で着替えをしていると、隣のクラスの東出祥也が近づいて来た。彼とは去年まで同じクラスで、数少ない友達の一人だった。

「さっきおまえのクラスの女子、随分とやられてたな」
いきなりそんなことを言った。

「見てたのか？」

雅成はどう反応するのが一番自然なのか分からず、とりあえずそんな言葉を發した。

「ああ、あれは明らかに一人だけを攻撃してたんだ」
「でも、どうして？」

雅成にはそれが正直疑問だった。

彼女はいつも孤独なのだから、人畜無害の筈である。人から妬まれたり、恨みを買う人間とは到底思えなかった。

東出は声をひそめて、

「どうも変な噂があるらしいんだ」
「噂？」

「ああ、どうやら彼女は不良らしい」
「不良？」

雅成は驚いて訊き返した。にわかに信じられなかった。

麻希は確かにぶっきらぼうな所はあるが、決して不真面目というわけではない。毎日きちんと学校に通って、授業もしっかり受けている。

自分は一日中隣に座っているから分かるのだが、彼女は不良なんかではない。何かの間違いではないのか。

「女子が話しているのを聞いたんだが、放課後ヤバイ所に入ったり、校内でタバコを吸ってるって話だ」

東出はますます見当違いのことを言う。

雅成はついつい笑ってしまった。

そんなことはあり得ない。みんな、麻希のことを誤解している。

「それで、うちのクラスの女子にとっては、あれが制裁のつもりだっただろう」

東出はなおも続けた。

「制裁？」

「そうさ、中途半端な不良は叩かれるんだよ」

「どういう意味だ、そりゃ？」

雅成は着替える手を止めて、東出を睨むようにして訊いた。

「本物の不良だったら、後が怖くて手が出せないだろ」

「ああ」

「ところが、仲間もいなくて、身体も強くない不良なら、叩いても平気というわけさ」

何とも勝手な論理である。

本当に制裁を加えたいのなら、むしろ本物の不良にこそすべきではないのか。中途半端な不良なら、話し合いでけりが付く。

つまるところ、これは単なる弱い者いじめに過ぎない。

こんな馬鹿げたことに付き合わされてる麻希が可哀想である。

それでも東出は、

「お前もあんまり関わらないように、気をつけろよ」

と最後に付け足した。

教室に戻ると、ちょうどチャイムが鳴った。

体育の後の休み時間というのは、いかにも短すぎる。特に女子は着替えに時間が掛かるのか、まだ誰も戻ってきていなかった。

それでも日本史の教師は、何食わぬ顔で授業を始めた。

しばらくして女子が次々に教室に戻ってきた。

しかし、雅成の隣の席だけは、時間が止まったかのようにだった。
（麻希はどうしたのだろうか？）

雅成は心配になった。

ボールが顔面を直撃したので、保健室で休んでいるのかもしれない。

（何事もなければよいのだが）

日本史の授業は、板書の量が半端ではない。教師は喋りながら、次々と黒板に書き付けていく。

雅成は、麻希の分も取ってやることにした。

自分のノートが一番最後を丁寧に破り取り、同じことを二回ずつ写していった。

雅成は教師の言葉を聞きもらさず、必死にノートを作った。こんなに真剣に授業に臨んだことは、中学以来今まで一度もなかった。

黒板が何度も消されて、二枚の紙にびっしりと文字が並んだところに、麻希が戻ってきた。

鼻の辺りに湿布が貼ってあった。顔の半分が紫色に染まっている。彼女は教師に軽くお辞儀をして、自分の席まで戻ってきた。

そして何事もなかったかのように、静かに腰を下ろした。

彼女は周囲の視線を遮るように片手で顔を覆い、もう片方の手でぎこちなく教材を準備した。

雅成は、彼女に破ったノートを差し出した。

「これ、ここまでの板書」

雅成は優しい言葉の一言でも掛けてやろうかと思ったが、どうもそれは彼女が望んでいることではない気がして、敢えて言わなかった。

麻希は一瞬目を丸くして、

「ありがとう」

と小さく微笑んだ。

初めて麻希の笑顔を見た。

湿布を貼った彼女の笑顔には、気取ったところがまるでなく、自

然な優しさに溢れていた。彼女にもこんな顔があるのか、と少々意外に思った。

雅成は心の中にぬくもりを感じていた。麻希に対して、まちがったことをしていないという自信が湧いた。

彼女はその後一度も雅成の方を向かなかった。次から次へと流れていく黒板を自分のノートに受け止めていた。それはいつもの彼女だった。

今は、麻希の気持ちが多量なりとも、自分には分かる気がする。

中学時代、雅成は人からあまり相手にされていなかった。引つ込み思案で、目立たない存在だった。周囲からは、やれ消極的だ、無気力だなどと言われ続けた。そんな自分は人より劣ると決めつけていた。自分が嫌いになっていた。

しかしそれは違うのだ。自分だって毎日を精一杯に生きていた。たとえ人より優れた結果が出なくても、確かに日々を生き抜いていた。

地味な人間も、派手な人間と何ら変わりはない。内に秘めたささやかな感情、主張もちゃんとある。それが周りの騒音にかき消されて、聞き取ってもらえないだけなのだ。

雅成は、いつしか麻希を自分自身と重ねて見ているのかもしれない。かかった。

第三部

5

翌朝、教室に入ってきた麻希は綺麗な顔をしていた。どうやら顔の腫れも引いたようである。雅成は安心した。

ひよっとすると、彼女は学校に來なくなってしまうのではないかと気がかりだった。

しかし彼女は雅成の優しさに触れて、孤独でないことを悟った筈である。もしそうであるならば、彼女は必ず自分の前に姿を見せてくれる、そんな自信も実はあった。

雅成は、麻希の姿を見て素直に嬉しかったのだが、すぐに彼女の異変に気がついた。様子がいつもと違うのだ。

はつきりとは断言できないのだが、いつもの彼女らしさが消えていた。慣れないことをする前の緊張感が、身体からひしひしと伝わってくる。

そんな麻希を見るのは初めてだった。

「おはようございます」

麻希は雅成の顔を認めると、軽く頭を下げた。

先に挨拶をされるのは、妙な気分だった。彼女が積極的に話掛けてきたことに少々驚いた。

雅成は、挨拶を返して、麻希の顔を近くで観察した。

上唇が少し腫れていた。それでも大きな腫れは見事に消えて、つるりとした顔がそこにあった。

「昨日は大丈夫だった？」

雅成は優しく声を掛けた。

「はい、何とか」

昨日のことをきっかけに、彼女は湧き出る泉のように喋り始めるのではないかと考えていたのだが、さすがにそういう具合にはいか

なかった。

彼女は席につくと、それで会話を終わらせてしまった。

お互いに言葉は交わさなくても、雅成は麻希の味方であるつもりだった。この学校で、自分は彼女の唯一の理解者である気がした。

「あ、そうだ」

麻希は急に思い出したかのように声を上げた。

しかしそれは、実はシナリオ通りで、彼女は切り出すタイミングを見計らっていたようにも思えた。

鞆から何やら取り出した。

派手な紙袋だった。赤と白のストライプがクリスマスを連想させる。上端部には、ご丁寧にもピンクのリボンまで掛けてある。

「はい、これ」

麻希はその紙袋を、無造作に雅成の机に置いた。

一瞬、何のことだか理解できなかった。この状況を察するに、これは自分への贈り物であるらしい。

もう少し補足説明が欲しいところだが、すでに彼女の顔はこちらを向いていなかった。どう見てもプレゼントを人に贈るやり方ではない。

「これ、オレに？」

雅成は半信半疑で確認した。

「そう。昨日のお礼」

どうやら日本史のノートのことを言っているらしかった。それにしても大げさな外装である。中には何が入っているのだろうか。

「別にお礼なんていいのに。でも貰っておくよ」

そう口では言いながらも、雅成は嬉しかった。彼女との距離が縮まった気がした。

「中にノートが入ってる」

彼女はそう付け足した。

それにしても、紙袋が膨らんでいる。中身はノート一冊だけではなさそうだ。手に持つと、中からビニール袋がかさかさと言を立て

た。

雅成はそれ以上、何も言わずにおいた。
代わりに、その紙袋を耳元まで持っていていき、二度三度振って音を
確認した。

麻希は思わず笑っていた。

いつもと同じ昼食時間を迎えていた。

麻希は実のにんびりと菓子パンを食べている。それはまるで何か
の作業のようで、決して楽しそうではない。

雅成は、そんな彼女に話掛けたかった。少しでも彼女が楽しい気
持ちになってくれればよい、そんな願いだった。

さつさと食事を済ませると、麻希から貰ったプレゼントを机の上
に置いた。これをきっかけに、彼女と自然に話ができるような気が
した。

「篠宮さん、これ開けてもいい？」

「あなたの物だから、ご自由に」

中からは、クッキーの詰まった透明な袋と、新品のノートが出て
きた。

「こっちはおいしそうだね」

雅成はクッキーの小袋を手にして言った。

しかし昨日のお礼としては、やはり大げさに思われた。たかだか
ノートを書き写したぐらいで、お菓子まで付けるものだろうか。

「これって、もしかして、君の手作りとか？」

麻希はそう言われて、雅成の方に向き直った。

「違うわ。市販品を買ってきて、その袋に詰め替えただけ」

「そうなんだ」

余計なことを言ってしまった。そんな野暮なことを言わせるつも
りはなかった。

しかし彼女は特に困った表情も見せずに、

「私、料理は苦手だから」

と言って、またパンを口に入れる作業に戻ってしまった。

雅成は途端に居心地が悪くなった。彼女を嫌な気分にするつもりはなかったのである。ちょっと勢い込んで訊いてしまっただけなのだ。

しかしその日を境に、二人は多少なりとも話をする間柄になった。とは言え、彼女は積極的に話掛けてくるわけではなく、雅成の言葉に相づちを打つぐらいのものであった。

その後学校内で、麻希に対する露骨な嫌がらせは、雅成の知る限り起きなかった。

しかし悪い噂は学校中に広まり、人を寄せ付けない彼女の性格と相まって、次第にみんなから無視されるようになっていった。

七月に入り、夏休みが目の前に迫っていた。

しかしその前に期末考査と三者面談が、雅成の前に立ちはだかる。これらを乗り越えて、初めて夏休みが許される。いや、テストの結果によっては、強制的に補習になることも考えられる。そうなるかと夏休みどころではない。

その点、麻希の成績はどうなのだろうか。

彼女は授業を真剣に受けてはいるものの、小テストの結果は芳しくなかった。遊び呆けている自分と、それほど得点は変わらないのである。どうやら彼女は、昔に習った筈の知識が所々で欠落しているようだった。

雅成の前に座っている女子二人が、話をしていた。

「進路調査の用紙は、もう提出した？」

「まだよ。これって、今度の懇談会の資料になるらしいから、いい加減に書くわけにはいかないんだって」

そう言えば、雅成もまだ提出をしていなかった。

自分は、勉強が得意でないし、打ち込んでいるスポーツもない。人付き合いも上手な方ではないし、これといった特技も見当たらない。

い。

こんな自分に、どんな積極的な将来があるというのだろう。雅成はこんな時、決まって自己嫌悪に陥るのだ。

（麻希は将来のことをどう考えているのだろうか？）

雅成は少し興味が湧いた。

音楽室に男女混声の合唱が響き渡っていた。

雅成のクラスでは、今日から練習が始まった。八月末に開催される文化祭で、各クラスが歌声を披露することになっていた。

まだ今の段階では、クラスの歌声は一つにまとまっていない。ただ各自が独りよがりになんか声を出さただけでは、ハーモニーは生まれない。練習をしていて、雅成はおやつと思った。

隣りで歌う麻希の音が、驚くほど透き通っていたからだ。明らかに彼女の歌声は澄んでいる。まだ多少抑え気味ではあるが、声に確かな存在感がある。自分にはない才能を感じる。

男女に分かれて、数人ずつで発声練習をすることになった。

その時、麻希の声は他の連中を圧倒するほど伸びていた。歌に主張が感じられた。その場に居たクラスの誰もが、それを認めたようだった。

音楽の教師もすぐに彼女の才能に気づいて、

「篠宮さん、ちょっとお手本に一人で歌ってみて」と要求した。

教師がグランドピアノを奏でた。

その軽快な旋律に見事に融合するかのように、麻希の歌声が重なる。彼女の歌は既に完成の域に達していた。練習する必要もない程だった。どうしてこれほどの能力を今まで隠していたのか。

彼女の歌声を前に、クラスの誰もが言葉を出せなかった。その美しい歌声に驚くばかりだった。

どこからともなく拍手が沸いた。みんなは顔を見合わせて、口々に彼女を称えた。

篠宮麻希には、素晴らしい才能があったのだ。

授業後、音楽室から教室に戻ってくるなり、

「歌が上手いんだね。びっくりしたよ」

と雅成は声を掛けた。

この言葉を聞いた時、麻希の反応は明らかにいつもと違っていた。その言葉をきっかけに、彼女の中の歯車がようやく動き出したかのようだった。

笑顔で雅成の顔を見る。

「そうかしら」

彼女は照れを隠すように、無感動を装ってそう言った。

しかし雅成の褒め言葉が、彼女の心を揺さぶっているのは明らかだった。

「昔、合唱部に入ってたの？」

「ううん、入ってないよ」

彼女は嬉しそうな顔をして、首を振った。

「篠宮さんはいいよな。歌という特技があるから」

それは雅成の本音だった。お世辞でも何でもなかった。

「でもね、私、他に何の取り柄もない」

「いや、何もないのはオレの方だよ」

そうなのだ。彼女には綺麗な歌声がある。それに比べて自分には人に自慢するものが何もない。正直、麻希が羨ましかった。

（彼女は、人前でもっと自信を持っていればいい筈だ）

雅成は彼女の顔を見つめてそう思った。

第四部

6

「よかつたら今日、一緒に帰らないか？」

期末考査が終わったところだった。雅成は思いきって麻希に声を掛けてみた。

教室の中は、重圧から解放された生徒たちの笑顔で満たされていた。みんな、この瞬間を待ち望んでいたのだ。

生徒たちは競うように教室を出て行った。ずっと朝から缶詰だったこの部屋に、一秒でもこれ以上居たくないという心理が働くのだろう。

どうしてこれほど彼女に対して積極的になれるのか、自分でも分からなかった。ただ、麻希とはもっと話す必要があるという気がずっとしていた。

彼女はすぐには答えなかった。鞆の中をあらためていた手をしばらく止めて、

「ごめんなさい。また、今度」と言った。

麻希は自分が思うほど、まだ心を開いてくれないようだ。雅成は寂しく思った。

「さようなら」

麻希は立ち上がると、教室を出て行った。

彼女はクラブ活動をしていない。今日は家の用事でもあるのだろうか。もしかすると、自分のことを意識的に避けているのかもしれない。そう思うと、気分が重かった。

雅成は諦めて、一人教室を出た。

廊下のずつと先を麻希が歩いている。

すると今、雅成の目の前に他のクラスの女子が二人、突然割り込

んできた。

二人は目配せをして、身をかがめるように麻希の背中を追っている。

雅成は、一瞬にして全てを理解した。

あの二人は、麻希の後をつけて、彼女が何か悪事を働かないか、監視しようというわけである。

まだこんな嫌がらせが続いていたことに閉口する。

二人は麻希に付かず離れずで歩いていく。当人はまるで気づかぬようだった。三人とも校舎を出ると、そのまま校門を抜けた。まるで刑事ドラマの尾行である。前に行く二人は、あれで探偵を気取っているつもりなのだろう。

雅成もそんな二人に続いた。もしも彼女らが麻希に危害を加えるようなことがあれば、阻止しなければならぬ。

いつだったか、東出が言っていた話を思い出した。

麻希がよからぬ場所に出入りしている、そんな噂だった。それをあの二人は見届けようというのだろうか。

今、三人は坂を下り始めた。

先頭に行く麻希は、帰りも歩くのが遅かった。まっすぐ自宅を目指しているには見えない。やはりどこかに立ち寄るつもりなのだろうか。

彼女は足が絡んでしまうような、どこかふらふらした動きで進む。この後、誰かと待ち合わせをしているような様子でもない。

麻希はそんな歩き方で、駅前通りを抜けていく。色鮮やかな商店街の飾り付けに目を奪われているようだ。

ようやく麻希は駅に辿り着いた。切符売り場の自販機の前で立ち止まった。通学定期を使わないのだろうか。それとも自宅に向かわず、どこかに寄り道するというのだろうか。

彼女は壁に掲げられた大きな路線図を見上げた。

確かな目的地があるようには見えなかった。右に左に何度か顔を向けた。

そんなふうにしてから、彼女は券売機で切符を買った。
尾行する二人も、わざと別の列に並んで、同じ切符を買う。

雅成も二人に続こうとしたちょうどその時、中学生らしき一団が流入してきた。一気に列が渋滞する。

しまった、これでは三人に置いていかれる。

雅成ははやる気持ちを抑えながら、先に行く彼女らの姿を目で追った。

三人は、順番に改札口に吸い込まれていった。

券売機が空くのを我慢して待つ。心だけが焦る。果たしてあの三人に追いつけるだろうか。

雅成は切符を手にすると、改札に駆け込んだ。
どのホームだろうか。辺りを見回す。

手前のホームは乗客の数が多かった。この中に紛れているとかなり厄介である。

それでも雅成は諦めずに、麻希の姿を探した。

突然、ベルが鳴り響き、列車が入ってきた。

だめだ、列車の車体が壁となって、もう誰の姿も見えなくなった。
一段と焦りが募る。

跨線橋を走った。

しかしホームに届く直前に、発車のベルが鳴り出した。

慌てて階段を降りた。確認はできないが、もう乗り込むしか方法はない。

雅成の目の前で、無情にも扉が閉じた。列車が動き出す。
間に合わなかった。

列車が去ってしまうと、ホームには静寂だけが残された。

雅成は肩で大きく息をする。

疲れはまるで感じなかった。ただ麻希を想う気持ちだけだった。

（彼女の身に何も起きなければいいが）

新しい視界が開けていた。奥のホームが見渡せた。向こうはローカル線で、乗客もまばらだった。

そこに、麻希の姿があつた。背を向けて立っている。ほっと胸を撫で下ろした。

何とか彼女に追いつけた。

しかし全ては偶然がもたらした結果なのである。ちつとも彼女を守っていることにはならない。雅成は自分の無力さを感じずにはいられなかった。

列車が来るまでには少し時間があつた。同じホームに降り立つのは目立ち過ぎる。

跨線橋の上でしばらく待った。麻希から少し離れた所に、二人の女子もいる。

列車がやって来る頃には、ホームは混雑していた。

そんな大勢の人々に紛れるように、雅成は乗り込んだ。

麻希は出入口付近に立つて、ずっと窓の外を見ている。少し離れた座席に二人の追跡者が腰を下ろしていた。

しかし彼女はどこへ行くつもりなのか。この路線は、確か海沿いを走って隣町までつながっている。

この短距離切符では、数駅しか乗れない。

麻希は二つ目の小さな駅で下車した。

ホームからは夏の海が見えた。夕方とはいえ、昼とは変わらぬ熱気が身体を押し包んだ。

麻希は改札まで歩いていく。

そろそろ、この二人に警告した方がいいだろうか。

雅成は二人に小走りで近づいた。麻希の背中が見えなくなったのを確認してから、小さく声を上げた。

「おい、待てよ」

二人が同時に振り返った。

「彼女に近づくのは止める」

なぜか雅成には、勇気が湧いていた。日頃、人に声を掛けるのも躊躇する自分が、見知らぬ女子を相手に、これほどきっぱり注意できるのが不思議でならなかった。まるで怖いとは思わなかった。正

義を貫く気持ちで、自分を支えてくれていた。

「あんたには関係ないでしょ」

片方が感情的な声を張り上げた。

その声があまりにも大きかったため、先に行く乗客が一斉に振り返った。すかさず駅員が飛んできた。

「どうしましたか？」

「いえ、何でもありません」

もう片方が努めて穏やかに言った。

乗客の多くが何事かと自分たちを見守っていた。

その中に、麻希の顔があった。

彼女に見つかった。雅成は顔面蒼白になった。

駅員への説明が続けられていた。雅成にとって、それはもうどうでもよかった。

「私たちは同じ高校の知り合いですので」

そう言った一人が無言を言わず、雅成の身体を引っ張った。

三人揃って、何事もなかったように改札を出た。

そこには麻希が待ち構えていた。

彼女はどんな気持ちでいるだろうか。まっすぐに彼女の顔を見られなかった。

「あなたたち、私の後をつけてきたの？」

麻希が訊いた。その声はひどく挑戦的であった。

その響きに、二人の女子もさすがに恐れをなしたのか、

「じゃあ、さよなら」

と言いついて、その場をさっさと立ち去った。

雅成はその場で動けなかった。

いつしか駅に人の流れはなくなっていた。麻希と雅成だけが残されていた。

彼女にどう説明すれば分かってくれるだろうか。ただそれだけが頭を巡っていた。

「あなたも私をつけてたの？」

麻希は穏やかな声で訊く。

「うん、いや、君のことが心配でつい」

言葉が喉に引っかかるような感じだった。

「私にはそんな心配、要らないのに」

麻希は、さつさと一人で歩き出した。

雅成も無言で後に続く。

駅のすぐ裏は、海が開けていた。

麻希はコンクリートの階段を下りていった。海風に乗って、潮の香りが運ばれてくる。

海開きはまだなのか、人影はほとんどなかった。遠くで犬を散歩させる子供の姿があった。

海の家がひっそりと並んで建っている。開口部は全て板で覆われて、まるで大きな積み木のようなだった。

麻希はその片隅に鞆を置いた。そして靴を脱いで、靴下まで脱ぎ捨てた。

白いブラウスの麻希は、まっすぐ波打ち際まで駆けていった。両足が砂を巻き上げて、足跡が彼女を追う。

麻希はまるで草原を走る動物のように速く、力強く駆ける。学校生活は無感動に過ごす麻希とは別人だった。あれは仮の姿で、こちらが本当の姿ではないのか、と考えたほどである。

砂を跳ねていた長い足は、今度は海水を跳ね出した。

白いブラウスの少女は、初めて海に来たかのように波と戯れた。しばらく彼女は打ち寄せる波に合わせて、身体を動かしていた。

まるでダンスをしているようだった。その動きはしなやかなで、躍動感に溢れていた。

雅成はそんな少女を、ただ黙って見守っていた。

激しい動きに疲れたのか、麻希はゆっくり歩いて戻ってきた。もう十分海を堪能したと言わんばかりの満足気な顔だった。

近く来ると、麻希の呼吸は乱れていた。白い足が砂で汚れていた。

「こういうのが、青春なんですよ？」

「えっ？」

そう言って麻希は笑った。白い歯が印象的な笑顔だった。やはり学校での彼女は別人に思われた。

「ううん、何でもない。こうやって一度やってみたかっただけ」

それは、不思議そうに見つめる雅成への答えらしかった。

しかしまったく意味が分からなかった。

「これですっきりしたわ」

まだ足に砂がついていた。それを両手で払い落とした。

それから二人は砂の上に腰を下ろした。

「実は昔、この海に家族と一緒に来たことがあるの」

「へえ」

「でも、それって、青春とは言わないでしょ？」

雅成は笑ってしまった。

しかし麻希は真面目な顔をして、

「今日はあなたと来たから、青春よね」

何となく彼女の言いたいことは分かる。学校の友達と一緒に来たことが嬉しいということなのだろう。そうか、自分を友達扱いしてくれているのか。雅成は途端に嬉しくなった。

「君に兄弟はいないのかい？」

「姉ならいるけど。双子姉妹の姉」

「双子なの？」

雅成は驚いた。

学校にいた麻希と今ここにいる麻希は、ひよつとすると別人で、姉妹が入れ替わっているなんてことは、まさかあるまい。

しかし何故か気になった。

「双子ってことは、やはり顔も似てるの？」

「そうね、かなり似てるわ。あなたには見分けがつかないかも」

やっぱりそうである。この麻希が妹と言うのなら、学校で隣に座っているのは、やはり姉ではないのか。

「君は妹なんだろう？」

「そうよ」

「じゃあ、お姉さんはどこの学校に通っているの？」

「今は行っていないんだ」

彼女は答えにくそうに言った。それは高校に進学しなかったという意味なのか。それとも中退したという意味なのか。

いずれにせよ、これ以上突っ込んで訊ける雰囲気ではなかった。

二人はしばらく沈黙した。

波の寄せる音だけが辺りを支配していた。それは一定のリズムのよう聞こえた。

雅成は、麻希の歌声のことを考えた。

彼女の綺麗な歌声を、うちのクラスに聞かせるだけでは勿体ない。学校中に聞かせてやりたい、と思った。

特に彼女を無視する連中に聞かせるべきである。彼女のよい一面を知れば、きっと彼らは誤解を解くだろう。彼女に敬意を払うようになる筈だ。

何かいい方法はないだろうか。

その時である。天啓がひらめいた。学園祭である。

毎年、生徒によるバンドコンサートが開かれていた。

雅成は思わず立ち上がった。

「篠宮さん！」

強い視線を彼女に投げかけた。

「一緒に学園祭のコンサートに出場しないか？」

「コンサート？」

「そう」

「あなたと歌うの？」

「いや、オレは無理。音痴だから」

「でも、一緒に、って？」

「オレは楽器をやる。そうだな、ギターでどう？」

「弾けるの？」

麻希はなかなか痛いところを突く。

「去年、親父のギターを譲ってもらったんだけど、全然。でもこれを機会に弾けるようになればいいんだろ？」

麻希はずっと雅成の顔を見上げていた。彼女はそんな大胆な提案に心を動かされたようだった。しかしすぐに顔の表情を曇らせた。

「でも、みんなの前で演奏するんでしょ。大丈夫？」

「大丈夫。君が歌ってくれるなら、オレも頑張って弾けるようにする」

「分かった、それじゃあ一緒に出ましょう」

麻希は力強く言ってくれた。

第五部

7

雅成は家に帰ると、服も着替えずに押し入れを開けた。去年父親から譲り受けたギターの保管場所は分かっていた。

当時ギターを手にしたばかりの時は、何だか自分が急に大人になったような気がして嬉しかった。毎日ケースから取り出しては本体を磨き、基本動作の練習に余念がなかった。

しかし、いつの間にかその情熱は冷めてしまった。ギターと同時に、格好良さを手に入れた気になっていた。それだけで満足してしまっていた。ギターの練習を続ける動機が極めて弱かったのだ。

だが、今回は違う。強い動機がある。これは麻希を救うための、自分に課せられた仕事のように思われた。

何としてもやり遂げなければならない。

埃の積もったケースを開けて、ギターを取り出した。

とりあえず構えてみる。そして思いのままに、弦を弾いてみた。アコースティックギターの六本の弦が創り出す乾いた音が、部屋中に響き渡った。

手の動かし方は一応覚えているようだ。しかしこの状態から、舞台上に立てるようになるまで、どれだけの時間を要するのだろうか。

曲目の選定は麻希に任せておいた。ただ自分は彼女の選んだ曲を演奏するだけである。彼女が気分良く歌えるなら、それに越したことはない。

一通り全音階を出してみたら、ギターを傍らに置いた。カーテンを大きく開いて夜空を見上げた。

麻希のことだけを考える。

砂を駆け、波と戯れる少女は、学校での彼女とはまるで別人だった。日頃抑圧されたものから解放されて、自由に身体を動かして、

笑顔に溢れていた。

そして麻希は双子の妹だった。顔の似た姉がいるという。

（それは何を意味しているのか？）

雅成は、これを聞いた時、何故か麻希の不思議さが全て説明できるような気がしたのだ。しかし今になって考えると、彼女はやはり不思議なままなのである。麻希の何一つも理解していない自分がいる。

どうしてこれほど彼女のことを気になるのか。その理由は自分でも分からなかった。

翌日の朝、麻希は先に教室に来ていた。

雅成の姿を認めると、すかさず立ち上がって駆け寄った。

「おはよう」

麻希は少し照れたような表情で言った。

そんな短い言葉にも、彼女の朗らかな気持ちを確かに感じ取ることができた。

「おはよう。曲目は決まった？」

雅成は早速訊く。

「うん。でもその前に、昨日はいろいろとありがとう」

麻希は頭を下げた。

「いや、こちらこそ、無理言つてごめん」

彼女は小さく笑顔を漏らした。

「それで、曲の件なんだけど」

麻希は嬉しそうに切り出す。これほど楽しそうな顔は今まで見たことがなかった。

「どんな曲？」

「ここではみんながいるから、お昼休みにちよつと付きあつてほしいの」

「いいよ」

「じゃあ、食事が終わったら体育館の裏に来て」

「分かった」

麻希が自分に積極的に話掛けてくれることが嬉しかった。

これをきっかけに、麻希とは親しくなれる、そんな予感を抱いた。雅成は、授業中に何度も彼女の横顔を見た。

麻希は垂れてくる長い髪を上げるようにして、ノートを書いている。雅成の視線には、彼女も気づいているようで、それをどこか意識しているようだった。

しかし彼女はあれから馴れ馴れしく話掛けてはこなかった。やはり学校では、どこか感情を抑えているように思われた。

昼食を食べ終わると、麻希は席を立ち、黙って教室を出て行った。しばらくしてから雅成も後を追った。

確かに体育館の裏は人気のない場所である。内輪話をするには、最適な場所かもしれないなかった。

しかし指定の場所に到着してみても、麻希の姿はなかった。

「こつちよ」

声のする方を見上げると、彼女は階段の上にいた。

「ああ、そこか」

雅成は安心して、スチールの階段を上り始める。二人が歩く度に金属の和音が周りに響き渡った。階段は折れ曲がっていて、ついに地上からは見えなくなった。

「こんなところに階段があつたなんて、知らなかったよ」

「実はここから、体育館のステージ裏に出られるの」

「へえ」

雅成は知らなかった。

階段の奥には、ドアが付いていた。中から鍵が掛かっているのか、こちらからはびくともしなかった。

麻希は階段に腰を下ろした。

続いてその横に雅成が座った。朝からずっと日差しを受けて、階段はほのかに暖められていた。

幅が狭いので、二人が座ると圧迫感がある。麻希とは身体が接触するほど近かった。

雅成は少し緊張する。彼女は案外平気な顔をしている。

麻希は楽譜を取り出した。

「これなんだけど」

雅成は手渡された譜面を眺める。果たしてどんな曲調なのか、自分には分からなかった。本当にこの曲を数週間後、ステージで弾けるようになっていいるのだろうか。不安がよぎる。

「この曲は、君のお気に入り？」

「そう、ね」

「ちよつと歌ってみてよ」

「いいわよ」

彼女は柔らかなハミングでメロディーを表現していく。雅成は目で譜面を追った。

爽やかな曲調だった。少しアップテンポな曲だが、メロディは比較的シンプルで、コードを押さえるにはそれほど苦労がないかもしれない。何より麻希の歌声と合いそうな曲だった。

「どうかしら？」

一通り歌い終わると、彼女は雅成の顔を覗き込むようにして訊いた。

「いいと思うよ」

麻希が好きな曲なら、それで問題はない。

「これは、誰の歌なの？」

「さあ、私も知らないの。でもいい歌でしょ？」

「そうだね」

そう言ったものの、雅成は違和感を覚えた。

好きな歌だと言う割に、誰の歌かは知らないと言う。それは妙な話である。彼女はどうかやってその歌の存在を知ったのだろう。普通は歌手が唄っているのを聞いて知るものだ。

しかし雅成はすでに別のことを考えていた。

まずはこの楽曲を自分だけで特訓しなければならない。伴奏がしつかりできるようになってから、初めて彼女と音合わせが可能になる。それは当分先の話になりそうだ。

雅成は彼女に一週間の猶予をもらって、一人で練習を開始することにした。

夏休みの始まる直前に、文化祭の案内が生徒に配布された。

クラスやクラブ主体の催し物が企画され、模擬店もいくつか予定されていた。そしてコンサートの参加者も発表された。

麻希と雅成がコンサートに出場することを知ったクラスの連中は、一様に驚いたようであった。教室の中は、二人の話題で持ちきりになった。

それもその筈である。日頃孤独に過ごす麻希と、地味で目立たない雅成が一緒にステージに上がるのである。驚かない方が不思議だった。

麻希はそんな周りの声には、一切無反応だった。

雅成は、人々の注目を浴びるようになって、教室での居心地が悪かった。人前で何かをするという経験がほとんどなく、戸惑いを隠せなかった。

体育の時間に友人の東出に会った。彼は雅成の性格をよく知っているだけに、一番驚いたのかもしれない。

「おい、お前本気かよ？」

東出は顔を見るなり、そんな言葉を投げかけた。

「ああ、そのつもりだ」

「学校中の笑い者だぞ」

「どうして？」

「分かるだろ。しかも篠宮麻希と出るなんて。一体どういうつもりなんだ？」

「彼女は歌が上手いから大丈夫だ。むしろオレのギターの方が心配なんだ」

「そういうことを言っているんじゃない。どうしてあんなヘンなヤツと組むんだ？」

「別にヘンじゃない。みんな彼女を誤解しているだけだ」

「どうなってもオレは知らないからな」

東出は怒ったように立ち去った。

雅成はそんな友人の声で、不安な気持ちを焚きつけられた。

二人して、学校中の笑い者、か。

確かに自分には人に誇れる才能はない。

しかし自分一人がステージに立つのではない。麻希がいる。彼女の才能はきつと学校中の生徒を魅了するに違いない。自分はそんな彼女を邪魔しなければいいのだ。きつとうまくいく、自分にそう言い聞かせた。

夏休みに入って、雅成はギターの練習に明け暮れる毎日を送っていた。

自分でも着実に上達しているのが分かる。最初はおぼつかなかったコード進行も、今では完全に頭に入っていた。後はそれをいかに滑らかに奏でるかである。

麻希とは明日、学校で会うことになっていた。雅成は早く彼女に自分の演奏を聴かせてやりたかった。自分の上達ぶりを彼女に褒めてもらいたかった。

明日とは言わず、今日にも彼女に会いたいと思った。ここまで仕上がっていれば、彼女と一度音合わせをしてもよかった。

麻希から教えてもらっていた携帯に電話を試してみた。しかし呼び出してはいるものの、彼女は出てくれなかった。

仕方なく、雅成はギターを持って、一人学校へ出向いた。麻希とは約束通り、明日会えばよい。

夏休み中でも学校は開放されている。

ひっそりした門をくぐって、校舎に向かった。

グラウンドで練習に打ち込む運動部員の掛声が聞こえてくる。音楽

室からトランペットの不安定な音が流れてくる。

雅成の足は体育館へ向いていた。

コンサートに出場する連中が、体育館の中や外で練習していることを知っていた。そんな彼らの様子も見ておきたいという気持ちだった。

体育館に近づいていくと、様々な楽器の音が入り混じって聞こえてきた。

館内では、生徒がそれぞれ固まって、練習に励んでいた。音合わせをする者、本格的に演奏するバンド、激しくダンスする女子のグループなどがひしめき合っていた。

雅成はその中に、一人で入って行く気には到底なれなかった。そこで麻希に教えてもらった裏の階段を思い出した。あそこなら静かで、練習にはいいかもしれない。

雅成はギターケースを担ぎ直して、歩き出した。

思った通りである。わずかに体育館から楽器の音が漏れていたが、人の気配はまるでなく、ひっそりとしていた。まさに穴場と呼ぶに相応しかった。

雅成はケースからギターを取り出して、階段を上がった。

階段を折れたところで、人の気配を感じた。視線を上げると、白いブラウス姿の麻希が座っていた。

雅成は飛び上がるほど驚いた。まさか彼女がいるとは思わなかった。

麻希も突然の来訪者にびっくりしたようで、慌てて何かを隠すような動きを見せた。慌てて隠すのに精一杯で、誰が来たのか分かっていないようだった。

しかし雅成は、そんな麻希の手が覆い隠した物を見逃さなかった。どうやらタバコの箱だった。彼女はこの人目につかない場所で吸っていたに違いなかった。

「ああ、もうびっくりしたじゃない」

雅成の姿を認めて、彼女はそんなふうと言った。

その声は不自然に大きく、しかも裏返っているような感じだった。明らかに動揺を隠せないといった様子である。

雅成は冷静に、

「やあ」

とだけ言った。

やはり麻希はタバコを吸っていたのだ。しかも校内で吸っていた。その行為はひどく挑戦的なものに思えた。噂は本当だった。

雅成は、知らず怒りがこみ上げてきた。これまで彼女を擁護してきた自分が、ひどく惨めに思われた。コンサートに参加する気が一気に失せてしまった。

「それ、前から吸ってたのか？」

雅成は彼女を睨んで、威圧的に言った。有無を言わせぬ強い口調になった。自分にはそれを言う権利があると思った。

麻希はあつさり観念したようだった。

「ごめんなさい」

「オレに謝ってどうするんだよ」

雅成は吐き捨てるように言った。

ひどく裏切られた気分だった。これまで必死になっていた自分を、彼女は裏でせせら笑っていたような気がした。

麻希は何も答えなかった。ただうつむいていた。まるで粗相をした召使いが、主人から許してもらったのをじっと待っているようだった。

コンサートの参加を取りやめにしようかと本気で考えた。今辞退すれば、恐らく後ろ指をさされることは目に見えている。しかし今の自分は、麻希と一緒に出場する気にはなれなかった。

「オレ、帰るよ」

そう言つてギターのネックを持ち直すと、麻希に背を向けた。

「待ってよ」

麻希の強い声を聞いた。

と、同時に彼女の手が腕を掴んだ。意外に強い力だった。思わず

振り返った。

「ごめんなさい。もう吸わないから」

彼女は嘆願するような目をして、小さな声で言った。
これほど弱々しい麻希を見るのは、初めてだった。

雅成はしばらく何も言わなかった。

どうしようか、と考えていた。折角お互いがここまで来たのである。自分が我慢することで、これまでの関係が続くなら、それがいいと思った。

「分かったよ」

雅成は彼女の手を振りほどいた。

「じゃ、私これを捨ててくる」

「いや、それは後でいいよ」

学校内でタバコの箱など捨てたら、余計問題になりそうだった。
とりあえず学校側には知られたくなかった。

「校外で、人に言えない場所に出入りしている、つても本当なのか？」

雅成は強い調子で訊いた。

「えっ？」

麻希はポカンとした表情になって、

「そんなことしてない、と思う」

と言った。

それは嘘のない自然の反応に思えた。本当に思い当たる節がないようだった。それはどうやら、ただの噂だったようだ。

雅成は少し安心する。

ようやく麻希の隣に腰を落ち着けた。

相変わらず体育館からは、様々な楽器がそれぞれの音色を調和できずに漏れてきていた。

「今日って、約束の日じゃなかったわよね」

「ああ」

ある程度演奏ができるようになったので、それを君に聞かせたか

った、と口まで出かかったが、飲み込んだ。

その代わりに、雅成はギターを構えて静かに演奏を始めた。

麻希に上手く聞かせようという気持ちだが、緊張感を生む。

ギターからは、濁りのない澄んだ音が溢れ出した。

彼女は雅成の奏でる音楽に驚いたようだった。

途中から彼女の歌声が合流する。

雅成は途中コードを間違えて、調子を狂わせてしまう箇所があったが、麻希はそのまま歌い続けた。

こんな自分の伴奏でも、麻希の歌を支えているのが分かる。雅成は彼女がこの歌を唄うのを初めて聴いた。

彼女の歌声は淀みがなく、しっかり伸び切っていた。それは、人知れずこの歌を何度も練習した成果に思えた。

雅成が演奏を終えると、麻希は肩を揺らすように拍手をした。

「上手ね、素敵だった」

雅成は少し照れくさくなった。

しかし手応えを感じたのも事実である。これならコンサート当日までに、もっと技術を向上できそうな気になる。

雅成には充実感が湧いてきた。高校生活でこれほど心が満たされる出来事は今までなかった。

「明日はどうする？ また一緒に練習する？」

麻希が訊いた。

「いや、感じが掴めたからいいよ。もう少し一人で練習してみる」
今弾いてみて分かったのは、思ったより歌のテンポが速いということである。コード進行に気を取られて、どうも彼女の歌声に置いていかれている。ここは改善すべきところだった。それが克服できたら、また彼女と音合わせをすればいい。彼女の方には問題がないのだから、わざわざ一緒に練習するまでもない、と思った。

「それなら、明日は時間空くよね？」

麻希がそう切り出した。それは最初から用意していた台詞のように思えた。

「そうだね」

「あのね、明日の夜、お祭りに行くんだけど、一緒に行かない？」
そう言えば、地元の夏祭りの日だった。小学生の頃は、両親に連れられてよく行ったものだが、最近は全然行っていなかった。ギターの練習の合間に出かけるのは、気分転換になっていいかもしれない。

「いいよ、一緒に行こうか」

「うん。よかった」

麻希は格別の笑顔を見せてくれた。

第六部

8

今日は雅成にとって、時間が経つのがやたら遅く感じられた。朝から何をやっても手につかなかった。

どうしてだろう。

一度構えたギターを傍に置いて考える。

麻希が積極的に自分を誘ってくれた。人と接することを頑なに拒否してきた彼女だけに、雅成は内心驚き、また嬉しさもひとしおだった。

これまで、人が大勢集まる祭りになど、大して興味も湧かなかった。自分は人混みよりも、静かな場所で一人過ごす方が性に合っている。

しかし今日は違った。夕方がとても待ち遠しく感じられる。誰かが自分を待っているという期待感。心がわくわくする。麻希も今、同じ気持ちでいるのだろうか。

友人の東出がいつか言っていた、

「気をつけるよ」

という言葉が思い出された。

確かに麻希は学校でタバコを吸っていた。周囲の悪い噂は本当だった。

あの時は正直、彼女に騙されていたような気分になった。

しかし彼女は開き直ることをせず、いきなり謝った。

その瞬間、何故か彼女とは他人ではない、もっと強い鎖で繋がっているような気がしたのだ。

あの感覚は一体何だったのだろう。

本来なら、彼女を突き飛ばして、さっさとその場を立ち去ることもできたのである。それなのに、その場に踏みとどまった。

コンサートの出場も取りやめようと、頭では結論を出しておきながら、実際そんな気はまるでなかった。

むしろ、彼女と一緒に居よう、そんなことを考えた。
何故だろう。

彼女の孤独をこれ以上放っておけないと思ったのだろうか。でも、そんなのは自分が引き受けるべき仕事ではない。

いや、そうではない。そんな仕事だからこそ、自分にしかできないのかもしれない、そう雅成は考える。

しかし、麻希のことを完全に信じられない自分も、実はいる。

タバコが見つかった彼女は、ひどく慌てていた。明らかに彼女は、今後自らの不利益を予測した筈である。

もしかすると、今日祭りに誘ったのは、実は彼女の方に、まるで別の考えがあつてのことではないか、という気もするのだ。

すなわち、このままではコンサートに出られなくなってしまう。

彼女としてもその機会だけは失いたくない。だから自分との関係を修復しようという算段である。

もしそうであるなら、彼女は雅成を最大限に利用しようと考えていることになる。

しかしそれでも別に構わない。どこか寂しい気はするが、それで彼女の学校生活がうまく行くのであれば、それもいいかもしれない。

麻希とは学校の校門で待ち合わせをしていた。

夕方、少し早かったが、雅成は家を出た。

夏の夕日はまだ西に残っている。外に出た途端、昼間と変わらぬ熱気に包まれた。手足を動かす度に、まとわりついてくるようだ。そんな中、一人で学校を目指した。

途中で浴衣姿の若い女性たちに出くわした。この暑さをすっかり忘れていような笑顔である。夜には花火大会もあるので、それを楽しみにしているのかもしれない。

雅成は約束の時間より、三十分以上も早く着いてしまった。

もちろん、麻希の姿はなかった。

鉄の扉は閉じられていた。生徒はみんな帰ってしまっていて、校内はひっそりと静まりかえっている。

ただ職員室には、明かりがついていた。どうやら先生は残っているようだ。

扉は施錠されてはならず、少しの力でゆっくりと開いてくれた。雅成は校内に入った。

身を隠すようにして、体育館に向う。

裏の階段に自然と足が向いていた。時間を潰すには丁度いいかもしれない。

空はどこまでも茜色で、手でちぎったような雲が浮かんでいた。しかし体育館の裏側は日も差し込まず、あらゆる物をシルエットに変えていた。

昼間の印象とはまるで違って、どこか寂しげな雰囲気が漂っていた。

雅成はゆっくりと階段を登り始める。

「雅成君！」

突然、頭上から声が降ってきた。

弾かれるように、顔を上げる。

そこに麻希がいた。

彼女も周りに同化して、ただのシルエットに過ぎなかった。白いブラウスだけが妙に浮かび上がって見えた。

それは昨日、ここで見たのと同じ服装である。彼女はあれからずっとここに居たような錯覚を覚えた。まるでここだけ時間が止まっているかのようだった。

「篠宮さん、どうしてここに？」

思わずそんな声が出た。

「まだ時間には早いでしょ。だから待ってたの」

夕暮れが彼女から顔の表情を奪っていた。そこから感情を読み取ることはできなかった。

まさか、またタバコを吸っていたのではないか。

雅成は瞬時に彼女の周りを確認した。

しかしタバコを吸っていたような形跡はなかった。もとより、彼女は慌てていないところを見ると、的外れのようなだった。

「大丈夫だつて、心配しなくても。私吸ってないよ」

麻希は雅成の心の内を知ってか、笑ってそう言った。

安心したものの、彼女を信じてあげなかった自分が恥ずかしく感じられた。

しかしすぐに気を取り直して、

「いつからここに？」

と尋ねた。

まさかとは思うが、昨日から家に帰らず、ここに一人で居たような気がしたのだ。

「今、来たばかりよ」

「それならいいんだけど」

「ヘンなの」

麻希は笑った。明らかに彼女の気分は高揚しているようだった。

お祭りを楽しむ準備がすっかりできあがっていた。

「それじゃあ、行きましょ」

二人は階段を下りると、誰もいない校庭を通って、一気に校門まで駆け抜けた。

雅成は誰かに見つからないかというスリルを味わっていた。麻希も笑いながら隣を駆けていた。

しばらく歩いていくと、徐々に祭りの喧騒が二人を包み込んでいった。

大きなウサギの風船を持った子供が、お父さんの手に引かれて歩いてくる。横一列になって食べ物で賑わいながら闊歩する中学生らと一緒に歩いた。

麻希は左右に屋台が並ぶ道をゆっくりと歩く。雅成はそんな彼女

に歩幅を合わせた。

桜の季節を思い出した。初めて会った日も、彼女はこうして物珍しそうに歩いていた。

「お祭りは初めて？」

雅成は横から訊いた。

「初めてじゃないわ。昔、家族と一緒によく来たのよ」

「オレと同じだね」

「そう？ それで今はどうなの？」

「友人もいないから、中学ぐらいからずっと来てなかったなあ」

「私もそうよ」

「お互い、友達がいない者同士か」

雅成がおどけてそう言うのと、麻希は髪を揺らして笑った。
そして、

「でも、今日は違うわよね」

と真面目な顔で言った。

そんな麻希の瞳は雅成をしっかりと捉えていた。

祭りの屋台は昔と何ら変わることはない。焼き物売っているすぐ横で、金魚すくいをやっていたりする。テレビゲームが普及した今でも、昔ながらの素朴な遊びをしたくなるのはどうしてだろう。ゲームの原点が、実はここにあるからかもしれない。

二人で射的をやってみた。

麻希は高身長を生かすべく、身体を曲げるようにして銃を構えた。そして的のぎりぎり近くの所で発射するのだが、当たってもびくともしなかった。熱くなって何度かやってみたのだが、戦利品は小さなクマのぬいぐるみ一つだけだった。

麻希の隣で、雅成は才能ということを考えていた。

彼女には、歌という立派な才能がある。

では、自分には何があるのだろうか。さっきは似た者同士という話をしたが、才能では彼女の方がはるかに自分を上回っている。彼

女の目には、自分はちっぽけな人間に映っている筈で、それが情けなく思えてくる。

辺りがすっかり暗くなって、人々が大移動を始めた。どうやら花火大会が始まるようである。

二人も堤防を上がって、並んで土手に座った。かすかに草の匂いをする。

花火が一発打ち上がる毎に、観客の歓声が沸いた。

漆黒のキャンバスに真つ白な模様が描かれる。その模様は重なりあつて、予測のつかない複雑な造形を生む。と同時に、身体を芯から揺さぶる大音響が見る者を圧倒する。

雅成は、こっそりと麻希に視線を向けた。

彼女の目は、大空に描き出される、瞬間の芸術にすっかりと奪われていた。その一つひとつを、目に焼き付けるかのように見入っていた。

（麻希は自分をどう見ているのだろうか？）

雅成は彼女の横顔を見ながら考えた。

やはり自分は、篠宮麻希が好きなのだと思う。恋心と言うには、まだはつきりとした形にはなっていないのかもしれない。しかし確かに彼女の不思議な魅力に、自分は惹きつけられている。

彼女はそんな自分の気持ちに、少しでも気づいているのだろうか。今はただ彼女と一緒に居たい、そう静かに願う。

あつという間のショーであつた。最後の一発が夜空を彩ると、辺りは急に静けさを取り戻した。火薬の匂いだけが残された。あちこちで拍手が沸き起こっている。

「とても綺麗だったわ」

そう言つて、麻希は立ち上がるとスカートのお尻を叩いた。

雅成も黙つて腰を上げた。

花火大会が終わると、一斉に観客が同じ方向に動き始めた。家路を急ぐという目的は皆同じである。人の波が延々と遠くまで続いている。

二人はそんな波に押し流されるように堤防を歩いた。

「はぐれちやいそうね」

麻希は雅成の手を握った。

雅成も無言で強く握り返した。

黙ったまま麻希のことだけを考えた。この手の温もりを大切にしたい、と思った。

気がつけば、二人は人波から離脱して、堤防を下っていた。

「ねえ、ちよつとそこで休まない？」

麻希の指は、小さな公園に向けられていた。

「そうしよう」

二人は小道を入っていった。

誰も見向きもしない、小さな公園だった。真ん中に外灯が立っていて、その下にベンチがひっそりと置かれていた。辺りには誰もいなかった。

麻希が握っていた手を離して、ベンチに腰掛けた。

雅成の手にはまだ彼女の温もりが残っていた。手が離れると、自分の手が少し汗ばんでいるのが分かった。風を受けてすうつとする感じがあった。

公園の外側に自販機を見つけて、雅成はジュースを買った。戻って来て、一本を麻希に手渡す。

二人して、ベンチに腰掛けた。

まだ耳には花火の余韻が残っている。空を見上げると、まだ続きが打ち上げられるような気がする。

「今日は、来てよかったね」

ジュースを一口飲んでから、麻希が言った。

「ああ」

「今夜は、楽しかった」

彼女は、心底嬉しそうな顔で言った。

「これが青春、ってやつかい？」

雅成は、いつかの台詞を思い出して言った。

「そう、青春、青春」

彼女は笑った。

公園には二人しかいなかった。頭上の外灯が二人の姿を暗闇に浮かび上がらせている。まるで舞台に立つ役者を思わせた。自然に今度のコンサートのことが頭に浮かんだ。

今日はどうして自分を誘ってくれたのか、麻希に訊いてみたかった。

しかしそれは、なかなか口に行きできなかった。

「昨日、あなたのギターを聞いてびっくりしちゃった」

麻希が突然言い出した。

「どうして？」

「だって、最初、全然弾けないって言ってたもの。本当はギターやってたんでしょ？」

「いや、本当に弾けなかったんだ」

「嘘。だってあんなにすぐ上手に弾けない筈よ」

君のために毎日練習したんだ。君の顔を思い出して弾いていたんだ、そう言ってもいいのだろうか。しかし、それはためらわれた。

麻希は自分の台詞を言い終えて、黙って雅成の顔を覗き込んだ。いた。

彼女は何を待っているのか。

何も言わずに、ただ凝視している。次の自分の言葉を待っているようだった。

しかし何をどう切り出せばいいのか、雅成には分からなかった。

お互いが言葉を譲り合って、気まずい空気が流れた。

麻希は雅成から視線を外すと、真っ白な両足を交互にばたつかせるようにした。

「どうして今日はオレを誘ってくれたんだ？」

雅成は思い切って訊いていた。どうしても訊いておかねばならないことだった。

「実はあなたに話しておきたいことがあって」

麻希は神妙な顔をして言った。

今日の彼女は、いろいろな表情を持っていた。これほど感性豊かな少女だったのか、と改めて思い知った。教室の彼女はやはり別人に思われた。

「私が芸能界デビューする、って言ったら、どうする？」

「えっ」

雅成はそんな唐突な言葉に思考が追いつけなかった。自然とオウム返しになる。

「芸能界？」

確かに、そう聞こえた筈だが。

「そう」

麻希は大きく頷いた。顔には、いたずらっ子のような表情が浮かんでいた。何かの冗談だろうか。

「それ、本当の話？」

「一応、本当。でもまだ、正式に決めた訳ではないけど」

雅成の頭の中は混乱していた。ただ漠然と、麻希と離ればなれになる運命を予感した。

「いつ、デビューするの？」

「まだ決まってない」

「どういつきっかけで？」

「スカウトされたの、中学の時」

なるほど、そうか。それならあの上手な歌声は、確かに納得できる。そういうことだったのか。

芸能界入り、などということが自分の身の回りで起きるとは、今まで考えたこともなかった。自分にもそんな非日常なことが起き得るのか、と少し感慨が湧いた。

しかしまだよく分からなかった。確かに彼女は整った顔をしているし、背もすらりと高い。ルックスや歌声は芸能界で通用するのかもしいない。

だが性格はどうなのだろうか。これほど人に閉鎖的な人物が、果

たして芸能界に向いていると言えるのだろうか。

いや、そうではないのか、と思い直す。

どのみち、これから芸能界へ進むことで学校を辞めることになる。だから学校ではあんな振る舞いをしていたのではないか。友達もろくに作らなかつた理由もそこにある。

これまでの彼女の不思議さが、多少は説明できるような気がした。しかし雅成には、これ以上言葉を続ける力が残されていなかった。どうして、麻希はこんな話を自分にしたのだろうか。自分にどんな反応を期待しているというのか。

「ああ、何だかすつきりしたわ。あなたに隠し事するのが後ろめたい気がして」

麻希は夜空を見上げて言った。

長い髪の横顔は、今までとはまるで違って見えた。彼女は芸能人になれる、自分とは無縁の資質を持っているからに違いない。

「家族の人は知っているんだろ？」

彼女の横顔にそう投げかけた。

「うん、家族には言っただわ」

「それで、反応は？」

「両親は一応賛成してるみたい。お前の好きにきなさい、って」

「じゃ、双子の姉さんは？」

「反対してる。あなたには向かない、だって」

「ふうん」

顔のよく似た双子の姉だったか。その姉はどんな気持ちでいるのだろうか。

「でも、お姉ちゃんの言うことが正しいかもしれないよね」

それは意外な言葉だった。姉の意見を素直に受け入れるというのは、随分慎重である。普通なら、他人の忠告に耳も貸さず、突っ走ってしまうところだろう。

「家族以外には、言っていないの？」

「ええ。あなただけよ」

雅成は嬉しいような、寂しいような複雑な気分になった。

確かに自分だけに打ち明けてくれたことは素直に嬉しいのだが、やはり手放して喜ぶことができなかった。彼女が雲の上の世界に行ってしまったら、もう会うことなど思いも寄らない。

「でも、中学でスカウトされて、どうしてもすぐに行かなかったの？」

「そのまま東京に行ってしまうのが、何だか怖くて。地元で高校生活もちゃんとしたくって」

彼女はそんなふうと言った。

しかし芸能プロダクションというのは、そんなに待ってくれるものなのか。他にも若い子はたくさんいるだろう。なぜ、この麻希でなくてはならないのか。

「それで、君としてはどうなの？ やっぱり芸能界に入りたいんだろ？」

雅成はややぶつきらばうに訊いた。今の気持ちがそのまま口調になって出てしまった。

「あなたはと思う？」

麻希は逆に訊き返した。

雅成は躊躇する。

確かに麻希の人生は自分で決めればいいと思う。自分にあれこれ言う権利はない。ただ、もし今麻希がいなくなってしまうたら、それはそれで寂しいものになるだろう。

今、学校生活の中で感じ始めた心の充足感が、あつという間になくなってしまふのだろう。それだけは間違いない。

「オレには、芸能界なんて遠い世界だから、何のアドバイスもできないけど、君がやりたいと思うことを正直にやればいいと思う」

麻希はそんな言葉を頷いて聞いていた。

「分かったわ、今日はどうもありがとう」

彼女はそう言って、先にベンチから立ち上がった。

第七部

9

麻希と別れてから、雅成は一人歩きながら考えた。

花火に酔いしれた人々のうねりは、今はすっかり消え去って、夜空だけが静かに彼を見守っていた。

さつきから鈴虫の声が耳を占領している。まるで激しい雨のようだった。

彼女は芸能界にスカウトされていた。

その言葉を聞いた時、雅成は頭が真っ白になった。自分は、それほどの大人物を相手にしているのかと、全身が震えた。

しかし彼女には、確かにスカウトされるだけの才能がある。彼女の歌声を聴けば、誰もが納得するだろう。

そう言えば、コンサートで歌おうとしているあの曲は、もしかすると彼女のデビュー曲なのかもしれない。あの曲を選定した時、彼女は誰の歌かは知らない、と言った。

今にして思えば、まだ世に出ていないデビュー曲なのだから当然とも言える。

果たして麻希は、今後どうするつもりだろうか。

自分は彼女に、思い通りにすればよい、と言った。しかし内心では、彼女に東京に行ってもらいたくないという気持ちで一杯だった。彼女とは別れたくない。

雅成は、二人は一つのチームだと勝手に決めつけていた。自分が彼女を支えてやるのだ、などと思っていた。笑止千万である。麻希は、自分などまるで必要としていなかった。彼女は今、一人で飛び立とうとしているではないか。

雅成は夜道を立ち止まった。自分が情けなく思えてくる。

思わず道端の石ころを蹴飛ばした。それはどこか草むらへと消え

ていった。同時に、鈴虫が一斉に鳴き止んだ。辺りは静寂に包まれた。

雅成は、月夜が照らす道を歩き始める。

自分は、麻希のことを思い違いしていた。

彼女は学校生活で、孤独とは、これっぽちも感じてはいない。全ては、彼女に考えがあつてのことではないのか。

つまり彼女は芸能界へ進むため、退学することを前提にしていたのではないか。

立つ鳥あとを濁さず、である。

彼女は不用意に友人を作りたくなかったのではないか。どのみちすぐに別れが来る。それを見越した上で、彼女は敢えて孤独を選んでいたのではないだろうか。

雅成は無意識に夜空を見上げた。

無数の星が自分を見返す。

やはり、彼女に自分の想いを伝えるべきだったか。

そして、行かないでほしい、と正直な気持ちを言えばよかったのだろうか。

麻希との音合わせは、数日後に決めて、雅成はまた一人でギターの練習を始めた。

しかし今までのように力が入らなかった。

麻希はコンサートで歌を披露してから、学校を辞めてしまうような気がする。最後に全校生徒の前で自分のデビュー曲となる歌を唄って辞める。

それは最も彼女らしい幕引きではないだろうか。

雅成は彼女に振り回されてばかりのような気になった。彼女が学校生活に溶け込めるように、コンサートへの参加を提案したというのに、学校を辞めるなら、そんな必要はまるでなかったことにならないか。

雅成はそう考えて、ギターを放り出した。

一体、自分は何をしているのだろう。

次の日、ポストに一枚のハガキが入っていた。

それは、麻希が自分に宛てた暑中見舞いだった。

住所が書いてある。隣の小さな町だった。いつか彼女と行った海の近くである。

裏を返すと、風鈴とスイカの絵の横に、見覚えのある文字で、

「ギターの方はどう？ コンサートがうまく行くといいね」

そして一番下に、

「夏祭りはとても楽しかった。いい思い出になりました、サンキュー」

と添えられていた。

（いい思い出か）

雅成はハガキを握りしめたまま、切ない気持ちになった。

やはり彼女は芸能界に進むことを決心したのだろう。いい思い出というのは、芸能界に入る前の、ということなのだろう。

もう確実に麻希の心は動き出している。

彼女は一人で立派に自分の道を歩き出した。無力な自分の力など頼ることもない。

今度のコンサートに出場することに、果たして何の意味があるのだろうか。

彼女はこんな田舎の高校のステージに立つような人材ではない。

もつと大きな夢が待っている。彼女を誘った自分がひどく惨めに感じられた。

いや、でも彼女にとっては、このステージは、それこそ学校生活最後の思い出となるのかもしれない。

自分はその思い出をよりよいものにしなければならぬ。それが責任と言つものである。

麻希をしっかりと芸能界へ送り出す。そうだ、彼女を愛している自分だからこそ、その仕事を全うする義務がある。

雅成は、ハガキを机の隅に立て掛け、ギターをケースから取り出した。

もっと練習しよう。

そして学校中の生徒の拍手で彼女を送ってやろう、そう思った。

第八部

いよいよ文化祭は明後日に迫っていた。

今日は、麻希と最後の練習をする日になっていた。

雅成は東出に電話を掛けて、リハーサルに立ち合ってもらえないかと頼んだ。第三者から客観的な意見を聞いてみたかったのだ。

東出は、最初は麻希と関わり合いたくないと言っていたが、最後にはお前の頼みなら仕方がない、としぶしぶ了解してくれた。

体育館には、朝から出場者が続々と訪れていた。今日は出演順に特設ステージでの演奏が認められている。

そんな中、雅成もギターケースを抱えて、校門にやって来た。

麻希は木陰で待っていた。

雅成の顔を認めると、弾かれたようにして駆け寄ってきた。

「おはよう」

夏の日差しを一杯に受けて、彼女の顔は輝いていた。

こうして見ると、確かに彼女は綺麗だった。高校生としては、やや大人びた顔立ちが、長い髪とよく似合っている。

やはりこの先、彼女はテレビの中の存在になってしまうのだろうか。

そんなことを考えながら、挨拶を返す。

二人は肩を並べて、文化祭の立て看板の横をすり抜けた。

体育館ではすでに演奏が始まっている。流れている曲は、完成度の高さを窺わせた。こちらでも自然と身が引き締まる。

「それじゃ、行こうか」

出番を待つ間は、各組が自由に練習してもよいことになっている。

雅成は校庭の片隅で、麻希と音合わせをするつもりだった。

麻希とは、話したいことが山ほどある筈なのに、まるで言葉が出てこない。

隣を歩く彼女に迷いは見られなかった。芸能界に進むことを決心

したに違いなかった。後は真っ直ぐ進むだけである。何の躊躇もないはずだ。

それに比べて自分はどうか。

確実に麻希との別れが近づいている。そんな不安な気持ちばかりが身体を支配している。彼女と別れたくない。抑えきれない心の叫びは、彼女まで届くだろうか。

こんな二人が、果たして呼吸を合わせることなどできるのだろうか。

二人は木陰までやって来た。ここからは広い校庭が見渡せる。時折吹く風が、木々の葉を揺らし、乾いた音を立てた。

約束通りに東出が現れた。彼は惘然とした顔で立っていた。まだ麻希を敬遠しているような感じだった。

雅成は構わず紹介を始める。

「東出、こちらが篠宮麻希さん。彼女の歌は最高だ」

次に麻希の方を振り返った。

「こちらが、オレの友達の東出祥也。去年同じクラスだった」

麻希の目が輝いた。どうやら最初の観客となる人物に興味を持ったようである。

「雅成君のお友達？ よろしくお願いします」

お辞儀をすると、長い髪が肩からこぼれた。

「ちよつと弾いてみるから、聴いてくれ」

「分かった」

東出は軽く手を挙げて、ブロックに腰掛けた。

「それじゃ、行くよ」

雅成は麻希に目で合図を送る。

前奏が始まる。このパートだけでも何度練習したことが。すっかり身体に染みこんでいる。

ここまでは自分のペースだ。自分の右腕だけが、曲をリードする。

麻希の歌声が合流する。

彼女の澄み切った声が、辺りに響き渡った。その声はどこまでも届いているようだった。

伸びやかな歌声は、ついには大空へと吸い込まれていく。

東出の顔が見る見るうちに変わっていくのが分かる。予想通りだ。彼は予期せぬものを目の当たりにして、度肝を抜かれたようである。口がぽかんと開いたままである。

雅成の中に自信が湧いた。

ペースはどんどん上がっていく。

彼女の歌声に、今日はしっかりついて行ける。

雅成は腕が痺れるほど、強く速くストロークした。

身体が浮かび上がってくる感覚。このまま彼女の歌声に乗って、どこか遠くへ飛び立てるように思える。

彼女は最後までしっかりと歌い終えた。しかしまだ自分の伴奏は続く。

まだ最後の一仕事がある。彼女を無事に送り出すのだ。悔いのないように、彼女の旅立ちを見守ってやろう、それだけを考えた。

最後に力強く弦を弾く。

雅成は演奏を終えた。校庭の片隅には、静けさが訪れていた。

しかしギターの音色が、いつまでも鳴り止まぬ余韻があった。演奏は終わったというのに、周りの空気は共鳴し続けていた。

東出は、立ち上がって拍手をしていた。

びつくりしたような目をして、いつまでも拍手をした。

それに重なるように、別の拍手も聞こえた。

目をやると、鉄棒付近に十人ほどの人垣ができていた。いつから聴いていたのだろう。まったく気づかなかった。

彼らは互いに顔を見合わせて、頷きあっている。

隣で麻希が、自分に視線を向けているのが分かる。

その視線を痛いほど感じながら、雅成はゆつくりとギターを置いた。

東出が近づいてきた。

「凄いよ」

「上手だったわ」

二人の声がほとんど同時にぶつかった。

雅成の中には、満足感だけがあった。ついに完成したんだ、と感慨が湧いた。

「二人とも凄いよ。カッコ良すぎるぞ。どうやってこんなにできるようになったんだ？」

東出は明らかに興奮しているようだ。

「いや、凄いのは、彼女の方だよ。オレは引き立て役に過ぎない」

「確かに篠宮さんの歌は上手だった。何と言うか、プロっぽいつて言うか、高校生の次元じゃない」

麻希は照れながら、小さな声で、

「ありがとうございます」

と言った。

「お前のギターも良かったよ。情熱というか、圧倒的な迫力が感じられた」

「私もびつくりした」

麻希が横からそう言った。

「前よりも、うんと上達してた」

二人のそんな言葉を聞いて、雅成はやはり嬉しかった。

麻希と組んでよかった、と思う。彼女がいたから、ここまで来られた。

「これは、ひょっとすると優勝を狙えるかもしれないぞ」

東出が真面目な顔をして言った。

雅成と麻希は体育館にいた。

前の出場者が楽器を片付けるのを、二人は舞台の袖で見届けた。

ベルが鳴って、番号が呼ばれた。

ゆつくりと舞台の中央へ進む。

今舞台を見守っているのは、運営委員と、一部の出場者だけだった。

明日はどれだけの視線が、自分たちに注がれているのだろうか。

「では、お願いします」

委員のマイクの声が、がらんとした館内に響く。

目の前にあるマイクに向かって、クラスと名前を告げる。

「二年一組、芹澤雅成です」

「篠宮麻希です」

彼女の声が拡声する。

歌手のオーディションを受けているような錯覚が生まれた。何としても、このコンサートは成功させてやる。

開いた扉から、生徒の一団がなだれ込んできた。さっき校庭で演奏を聴いた者たちが、どうやら友達を誘ってきたらしかった。

演奏を開始する前から拍手をする者がいた。

雅成の心は意外にも落ち着いていた。麻希に目配せをしてから、演奏を始める。

彼女の声がマイクに吸い込まれていく。それは大型スピーカーを通して増幅される。圧倒的な迫力を感じる。美しい歌声が体育館の空気を震わせた。彼女の伴奏ができることが誇らしく思えた。

演奏が無事終わると、あちこちから拍手が沸き起こった。初めて麻希の歌声を聴く者は、高校生を遥かに超えた歌唱力に、驚いているようだった。

舞台から下りると、また拍手が起こった。

知らない連中が、声を掛けてきた。

「素晴らしかった」

「二人の息がぴったりと合ってる」

麻希は少し離れたところで、人々に包囲されてしまった。みんなが口々に賛辞を投げかけている。

雅成の方も、先輩から声を掛けられた。

「いや、なかなかやるね。俺たちはエレキだけど、アコースティ

ツクもいいもんだ」

また別の先輩が言う。

「君、二年生だったよね。うちの軽音楽部に入らないか？」

「サビの部分は、少し抑え気味にした方がいいかも。彼女の歌声をメインに持っていけば、より完璧だと思う」

知らない人から、これほど話掛けられたことはなかった。どんな反応を返してよいのか、内心焦った。

麻希の方には、ちよつとした人だからできていて、なかなか解放してもらえそうにない。

東出がジューズを買ってきてくれていた。

「完璧だったな」

「ありがとう」

雅成は受け取った。

「でも、篠宮さんって本当に凄いな。いきなり人気者だよ」

東出の彼女を見る目がすっかり変わっていた。

雅成はそれが嬉しかった。

麻希はまだみんなに囲まれている。笑顔を絶やすことなく、一人ひとりに応じていた。

彼女も変わったな、と思った。

雅成は複雑な気持が湧いてくるのを禁じ得なかった。

10

朝から雨が降っていた。

夏休みは今日で終わりである。明日はいよいよ文化祭が行われる。雅成にとって、今年は忙しい夏休みだった。これほど積極的な毎日を過ごしたのは、生まれて初めてと言ってもよかった。

それは、ギターの練習に明け暮れていたからか、それとも麻希と一緒に居られたからなのか。

夏祭りの日から、彼女は将来のことを一切口にしなかった。もうおそらく決心はついていて、赤の他人に語る必要はない、そう考えているのかもしれない。

雅成としても、今更その話を蒸し返すわけにもいかなかった。

心のどこかに小さな穴が空いてしまったようだった。四六時中、その穴からは何かが漏れている感じがする。

どれだけ麻希と一緒に居ても、まるで心が満ち足りないのだ。むしろ、その穴がどんどん広がっていくような気がした。

そんな気持を吹き飛ばそうと、ギターを構えてみる。

麻希がいない伴奏は、薄っぺらなものに思える。やはり彼女の歌が必要だ。自分の演奏だけでは、虚しさを覚える。

昼を過ぎてから、雅成は麻希の携帯に掛けてみた。

一体、何のための電話なのか、自分でもよく分からなかった。

呼び出し音は確かにするのだが、彼女は一向に出ない。

そう言えば、麻希は電話に一度も出たことがない。自分と親しくなることを避けているのだろうか。明らかに自分と距離を置いているように思われた。

もしそうなら、彼女の携帯を鳴らすのは、迷惑でしかない。

雅成はすぐに電話を切った。

しばらくぼんやりしてから、ギターをケースに収めて、服を着替えた。

学校に行こうと思う。

何だか無性に学校へ行きたい気分だった。そこで麻希と会えるような気がする。

雅成はギターケースを肩に掛け、雨の中、学校へ向けて歩き始めた。

夏休みの最後の日、学校には学生の姿が多く見られた。実行委員会のメンバーたちが、慌ただしく雨の中を駆けずり回っている。クラブやクラスで集合している生徒もいた。

雅成は、そんな生徒を尻目に、一人校門をくぐった。

自然と足は、体育館へと向く。

館内はすっかり特設ステージの飾り付けも終わって、華やかな雰囲気生まれていた。明日はあの舞台の上で、大勢を前にしてギターを披露するのかと思うと、わずかに足が震えた。

そのまま体育館の裏へ向かう。

麻希が居るかどうかは分からないが、たとえ居なくてもよい。とりあえずあの階段に座って、しばらく考え事でもしよう、そんな気分だった。

雨は激しくなってきた。

雨粒が屋根を強く打ちつける。それはまるで観客の拍手のように聞こえてくる。明日は絶対に成功したいと思う。

身体やケースが濡れないように、体育館の軒先に沿って歩く。しかしそんな努力も、この強い降りには、あまり意味がないようだった。

こんな悪天候の中、麻希がいるはずもない。

わざわざ来たことを少し後悔し始めた。

しばらくすると、目指す方から女性の声が幾重にも重なって聞こえてきた。その声は、雨の音に負けじと大きなものだった。

一体、何だろうか？

いつもは静かな体育館の裏で、何か異変が起きているのは明らかだった。

雅成は悪い予感がして、自然と駆け出していた。

階段付近に、女子生徒たちが傘を差して群がっていた。彼女らは何かを取り囲んでいるようだった。

雅成は、慌ててその人垣に近寄った。

ただならぬ気配を感じる。

彼女らを押し除けるように、視界を確保した。

これを予想しない訳ではなかった。

そこには、麻希が立っていた。ずぶ濡れだった。白いブラウスが

身体に張り付いている。

麻希ともう一人の女生徒が対峙していた。

その女子も同じように激しい雨に身を任せたままである。お互いが睨み合っている。

「おい、何しているんだ」

雅成は思わず叫んでいた。

その場に居合わせた人間が、一斉に雅成の方を見た。全員が女子であつた。

麻希と睨み合っている女子の顔に見覚えがあつた。いつか彼女を尾行していた連中の一人に間違いなかった。

麻希がトラブルに巻き込まれているのは明らかだつた。

「麻希、どうした、大丈夫か？」

雅成は、そう呼びかけた。

周りの女子を掻き分けて真ん中に出た。

麻希の目は、自分をも睨み付けているようだつた。ただこの激しい雨の中では、それすらよく分からない。

麻希の足下にはタバコの吸い殻がいくつも落ちていた。

もしか、吸っているところをこの連中に見つかったというのか。

もしもそうなら、それは非常に分が悪い。学校側に知られたら処分されるのは間違いない。いや、それよりもこれから芸能界にデビューしようとしている歌手にとっては、スキャンダルになりかねない。

雅成は瞬時に考えた。とにかくこの事態をうまく収拾する必要がある。

「やっと来てくれたのね、待ってたんだよ」

その声は、麻希ではなかった。名前も知らない、ずぶ濡れの女子だつた。

雅成の頭は混乱した。

彼女は何を血迷っているのか。自分は麻希の仲間である。

「一体、何のことだ？」

不快な気持ちだが、そんな言葉になって現れた。

「とぼけなくてもいいって。もうバレてしまったんだから」
その女子は続ける。

外野からも、「そうだよ」という声がした。

雅成は慌てた。どういうことだ。

「だから言ったでしょ。彼も私たちの仲間。今まであんたを騙して、人前に引つ張り出そうとしてただけ」

今度はそう麻希に向かって言った。

まるで言葉の意味が分からない。

「たばこを吸っているのは、事実でしょう」

傘の中から声がした。

麻希は強い視線を向ける。

「私、吸ってない」

「嘘言わないで。じゃあ、そこに落ちている吸い殻は何よ？」
別の鋭い声。

「私じゃない」

「あんたじゃなきゃ、誰のものって言うの？」

「知らない。でも、もう吸ってない」

雅成はしまった、と思った。麻希は口を滑らせた。

「今、もう、って言ったわよね。ということは、やっぱり吸っていたんじゃない」

鬼の首を取ったような勢いで、ずぶ濡れの女が言う。やはり見逃してくれなかった。

とにかくこの場を逃げ切る方法はないものか。このままでは、彼女の将来に大きな傷がつく。

「何言っているんだよ。それはオレが吸ったんだ、麻希のじゃない」

雅成はそう言って一歩前に出た。

周りの女子連中は言葉を失ったようであった。誰もが沈黙した。

「だから麻希は吸ってない、関係ない」

語気を荒げて、重なるように言った。

「何言っているのよ。この子が吸っている、ってあなたが教えてくれたんじゃない」

「嘘だ」

雅成は叫んだ。

その瞬間、麻希が体当たりをするように、円陣を突き破った。とつさの出来事で、雅成はどうすることもできなかった。

麻希の後ろ姿が小さくなっていく。

自分も彼女を追わなければならない。

その前に、この連中に確認することがある。

「おい、お前たち」

雅成はすごんだ声を上げた。こんなやり方で人を脅したことなど、生まれて初めてだった。

「麻希に何をしたんだ？」

「化けの皮をはいだけ」

一人がそう言った。

雅成はその声の主を睨み付けた。

「どういうことだ？」

「そう、かつかしいで。あんたもあんな不良の肩を持たなくてもいいのに」

「彼女は不良じゃない」

雅成は声を張り上げた。

「タバコ吸っていたのは事実でしょ。それなのに、コンサートで清純気取りで歌なんか唄うなんて許されないわ」

別の女が言う。

「真実を暴いただけでしょ、何が悪いの？」

要するに寄ってたかって麻希をいじめていた、そういう訳だ。これ以上、この連中と話しても無駄である。麻希を追おう。

雅成は何も言わずに、全力で駆け出した。

第九部

11

雨は依然として強く降り注いでいた。

それは、大地を蹴って走る雅成を容赦なく打ちつけた。

これは天の涙である。麻希の悲しみが天まで届き、大粒の涙となって大地を濡らしているのだ。

雅成はどこかに傘を置いてきてしまった。しかし今はそれどころではない。

姿の見えない麻希を追った。

この激しい雨の中、外を歩く者はいなかった。雅成の視界には、ずぶ濡れになって立つ緑の木々や、川と化したアスファルトの歩道が広がっていた。

人はみな、この天の攻撃を避けるように、どこかにひっそりと身を隠しているのだ。

出る杭は打たれる、か。

確かに麻希は普通の女の子とは違っていた。

それは出会った日から分かっていた。

彼女には優れた才能があった。その才能を生かすべく、芸能界を目指していた。その特異性こそが、彼女を特徴づけていたのである。麻希は自分の夢に向かって踏み出そうとしているのだ。

他の生徒と違って、それは当然なのだった。

学校生活では、時として保身のための作為的な人間関係が存在する。それを「協調」や「友情」などと称するのであれば、笑止千万である。

そんな人間はやたら「個性」を口にするくせに、周りから弾かれないことに苦心している。他人の目ばかりを気にして、形だけの付き合いに日々身を投じている。

一時の身の安全を手に入れるために、主張する人間を差別する。どうして大輪の花の芽を摘もうとするのか。個性あるが故に身体から発散するオーラを、連中はどうも理解できないらしい。

麻希の生き方を妨害する権利など、誰にもありはしない。

オレは、彼女の味方であり続ける。絶対守ってやる。そう心の中で叫ぶ。

オレは、麻希のことが好きなのだ。

雅成はぬかるんだ地面を速く、強く蹴って進む。

体育館を回って、校庭の方へ出てみたが、麻希の姿は見当らなかった。

彼女はこの激しい雨の中、どこへ行ってしまったのだろうか。

麻希は強い女でなければならぬ。無個性な連中に何を言われようと、それに左右されるほど心の弱い人間であってはならないと思う。

この先、芸能界で生きていこうというのであれば、今よりももっと辛いことが彼女の身に降りかかってくることだろう。この程度の挑発や中傷に負けるようでは心許ない。

麻希には強くなつてほしい、雅成はそう願う。

今は彼女の傍にいてやりたいと思う。言葉さえ要らない。ただ寄り添うだけでいい。

とにかく彼女を見つけることが先決だ。

彼女は家に帰ってしまったのだろうか。

そうか、携帯があつた。

雅成は校舎の軒下に入って、麻希の携帯に掛けてみた。いつものように呼び出し音が聞こえてくる。

しかし彼女は出ない。そう言えば一度も彼女は電話に出たことがないことに気がついた。

ふと見れば、校舎の出入口が開いている。

雅成は濡れの身体で中に飛び込んだ。自分の教室へ急ぐ。

勢いよくドアを開けたが、教室には誰もいなかった。

廊下で、文化祭の飾りつけをする、同じクラスの女子に出くわした。

雅成は勢い込んで、麻希のことを訊いてみた。

彼女の姿は見えていない、という返事が返ってきた。

時間だけが確実に経っていた。

結局、麻希を見つけれなかった。彼女を助けてやれなかった。

雅成は、自分が無力に感じられた。

こんな時、傍にいてやることすらできなかった。

今、彼女は一人どんな気持ちでいることだろう。この程度のいじめは、おそらく芸能界にだってあると思う。いや、もっとひどいとだって待ち構えていることだろう。

麻希はそれを持ち越えていかなくはならない。

彼女はきつと大丈夫だ、雅成は自分に言い聞かせた。

彼女は明日のコンサートで、しっかり自分の歌を披露すればそれでよい。

あんな女連中の脅迫に屈することなく、堂々としていればよい。

雅成はそう自分を安心させてみたものの、どうしても不安な気持ち拭いきれなかった。

これから麻希の自宅に行ってみようか。

正確な住所は覚えていないが、家に帰れば暑中見舞いのハガキがある。確かそこに住所が書かれていた筈である。

それに自宅に戻れば、水を吸って重くなったこの服を着替えることもできる。

雅成は校門まで歩き出した。

そこで思い出した。ギターケースを体育館の裏に置いたままだった。

この大雨の中で、果たして中身は大丈夫だろうか。
自然と小走りになる。

あの女連中の前にギターを置いてきてしまったのは、やはり迂闊だった。逆恨みで、いたずらされていけないとも限らない。

雅成の足はさらに速くなった。

体育館の裏までやって来た。

さつき麻希が幾重にも囲まれていたその場所には、今は誰の姿もない。

悪い予感のはず中した。ギターケースはどこにもない。あいつらに持ち去られたのだろうか。

これは大失敗である。ギターがなくては、明日の演奏ができない。とにかく大急ぎで探さなくてはならない。

慌ててその場を離れようとした、その時である。

目の前にある鉄製の階段が、わずかにきしんだようだった。

誰かがいる。

しかしここから見上げようにも、つづら折りの階段は、その裏側を見せているだけである。

雅成は恐る恐る階段を登っていった。

そこには背中を丸めた少女の姿があった。大きなギターケースを抱くようにして座っている。長い髪はすっかり濡れて頬に張り付いていた。毛先からは、水の雫が途切れることなく落ちていた。

「麻希！」

雅成の声が聞こえないのか、彼女は無反応だった。

しかし確かに声は聞こえている筈だった。その証拠に、ケースを抱える腕に力が入ったようだった。

「麻希、大丈夫か？」

彼女は雅成と目を合わせようとしなかった。

ただケースを大事そうに抱えたまま動かずにいた。親に叱られた子供がやり場のない怒りを胸の内に溜めている、そんな様子である。階段のどこか一点をぼんやりと見つめていた。

「麻希、風邪引くぞ」

雅成は彼女の肩を掴んで軽く揺さぶった。

「放っておいて頂戴」

麻希は強い調子で言っただけだったが、それはかすれた声にしかならなかった。

それが悔しかったのか、紫色に変色した唇を噛んだ。

「まさか、連中の話を信じているんじゃないだろうな？」

そうゆっくり問いかけた。

雅成には見えない自信があった。

麻希と自分は見えない絆で結ばれている。この程度の策略で、壊れてしまうほどの関係ではない。

「昔からいつもそうなの」

突然、麻希が口を開いた。視線は動かさなかった。

「せっかく人と仲良くなっても、いつもこうなっちゃう。周りの目が気になって、本当の自分の気持ちに嘘ついたりして。そんな自分がたまたま嫌になるのよ」

雅成は黙って聞いていた。よく意味が分からなかった。

要するに、あんな悪意に満ちた同級生の言動も無視できず、心が穏やかでなくなるということか。

誰だって、自分の評価は気になるものだ。それは何も麻希に限ったことではない。

「周りが何と言おうと、自分の信念を曲げる必要はないんじゃないか」

麻希は濡れた顔を上げて、雅成に強い視線を投げかけた。

初めて出会った頃の、あの挑戦的な目つきだった。今でもそんな表情を見せるのか。雅成は寂しい気持ちになった。

（まだ麻希は俺を信じてくれないのか？）

「いつだって私は、人によく思われたい、いい子を演じようって心の中で思ってる。本当は全然そうじゃないくせに、ハッタリだけで生きている」

「誰だってそういう面はある。特に芸能人を目指してる君は、誰

からも好かれない、っていう気持ちが強いのかもしれないが、それは自然なことじゃないか」

麻希は複雑そうな表情を浮かべていた。

自分は見当違いなことを口に出しているのではないか、と雅成は一瞬考えた。

しかしそのまま続けた。

「オレは芸能界のことはよく分らないが、そこには味方もいれば敵もいる。陰口や嫌がらせなんて、ごく日常のことだと思う。それを一々気にしていたら、本当に自分がやりたいことなんてできないよ」

「そうね」

麻希は諦めたように唇だけで笑った。

「さっきのあれは君の吸ったタバコじゃない。そうだろ？」

雅成には強い自信が生まれていた。

麻希は自分と約束したのである。芸能界デビューを控えた彼女が、そんな愚かなことをするとは到底思えなかった。

「信じてくれていたのね、私のこと」

麻希は震えた声で言った。

その声は寒さによるものか、感情の高ぶりによるものか、雅成には分からなかった。

「麻希、とにかく帰ろう」

雅成は彼女の手を取った。その手は氷のように冷たかった。

このままでは風邪を引いてしまう。明日のコンサートのこともある。

「ギター大丈夫かしら？」

彼女はさっきからそればかりを心配しているようだった。ギターケースを抱えたまま、離そうとしなかった。

「いいよ、それは。そんなことより君の身体の方が心配だ」

こんな状況でも、ギターを気にしている麻希がとても愛おしくなった。

「家まで送ろうか？」

雅成は優しく訊いた。

「ううん、大丈夫。一人で帰れるから」

麻希はきっぱりと言った。

「傘は持っているの？」

「大丈夫、これだけ濡れたら、もう傘なんて要らないわ」

麻希は笑って言った。

そう言えば、自分もどこかに傘を置いてきてしまったことに思い至った。

二人は階段を下りていった。

雨粒がまるで針のように地面を鋭く刺している。

生徒たちは帰ってしまったのか、校内はひっそりとしていた。

雅成はしばらく考えてから、

「じゃあ気をつけてな」

と言った。

「うん。明日のコンサート、頑張ろうね」

麻希はそう弾んで言うのと、駆け出した。

一度も振り返ることなく、雅成の元を去っていった。

強い雨しぶきが、景色から全ての色を奪い去っていた。それはまるで水墨画を思わせた。

そんな中、麻希の背中が小さくなっていく。

寂しい背中だった。今彼女の背負っている悲しみを、自分は一体どれだけ分かっていっているのか。

彼女を追いかけていきたかった。

しかしそんな資格が果たして自分にあるのか、雅成は考え込んだ。自分からどんどん離れていってしまう麻希の姿を目で追うのが精一杯だった。

いつしか雨足の勢いは衰えていた。それでも霧雨が作り出す薄いカーテンが、周りの景色を全て包み込んでいる。

雅成は一人、ギターケースを抱えて家路を急いだ。

ケースの中身は大丈夫だろうか。今すぐにも蓋を開けて確かめなくなる。

傘は差していなかった。身体中がすっかり濡れてしまった以上、もはや傘の必要は感じられなかった。

麻希は大丈夫だろうか。

さつきからそんな不安が、雅成を圧迫している。

どうして彼女の後を追わなかったのか。彼女の身体を気遣って、家まで送ってやるべきではなかったのか。頭の中で自問自答を繰り返す。

そうしなかった理由は分かっている。

麻希はもはや自分を必要としていない。それは時とともに、いつしか確信に変わっていた。

彼女に対して積極的になれない理由もそこにある。自分に自信が持てないのだ。

麻希との出会いは、無気力だった雅成に一筋の光を与えてくれた。身体に充実した精神が芽生えた。彼女との学校生活は、自分に驚くほどの勇気を与えた。

ところが麻希は優れた歌の才能を持っていた。何ら個性を持たない自分とは、まるで釣り合いが取れなかった。そして彼女は芸能界という、さらに手の届かぬ所へ羽ばたこうとしている。

麻希との別れが確実に近づいている、と思う。

明日のコンサートが無事終了すれば、彼女は雅成の元から姿を消すだろう。全校生徒の大きな拍手に送られて、彼女はこの学校を去っていく。それは麻希らしい幕引きに思われた。

そんな麻希の前で、自分は無力である。彼女を引き留めることなどではしない。

家の玄関を開けると、自分の身体よりも先に、タオルでギターケースを丹念に拭いた。ゆっくりと蓋を開けると、雨水が内側に染みを作っていた。

しかし幸いなことに、ギター本体までは達していなかった。

これは麻希に感謝しなければならぬ。

彼女は本来雨ざらしになっていた筈のこのケースをしつかり抱きかかえていた。そのおかげで、ギターは無事だったのだ。

階段を上がって麻希と再会した時、まず一番に彼女に「ありがとう」と言うべきだった。

そんな当たり前のことをすっかり忘れていた。どうやら自分は麻希を目の前にして、自然体ではいられなかったのだ。彼女が自分を捨てていく恐怖と戦っていた。

肌へばり付いたシャツを一枚一枚剥がすように取り去ると、シヤワーを浴びた。

皮膚が寒さによって萎縮しているのが分かる。熱湯がそれを溶きほぐす。

麻希も今頃、無事に家に着いただろうか。

第十部

1
2

雅成は風呂から上がると、早速ギターを構えた。

麻希の歌を奏でてみる。

乾いた音が部屋に響き渡った。幸いギターには何の異常もなさそうだった。

ギターを壁に立てかけて、ベッドに寝転んだ。

天井を見て、篠宮麻希のことだけを考えた。

果たして彼女は、芸能界に向いていると言えるのだろうか。

麻希は時に不安定な感情を覗かせる。他人の言動で、たやすく心が揺れ動いてしまうのだ。そんな弱い心で芸能界を渡り歩いていくのだろうか。

表向きは華やかでありながら、その実、芸能界は厳しい世界に違いない。毎年数え切れないほどの歌手がデビューを果たしながら、瞬く間に消えていく。

なるほど確かに麻希の歌唱力は認める。しかしそれが直ちに成功に結びつくほど、甘い世界ではないだろう。

もし彼女の気持ちを思い留めることができるのであれば、それは自分の仕事ではないだろうか。

雅成には麻希のことがよく分かる。彼女は決して強い女ではない。目の前にぶら下がった大きな餌に気を取られて、自分がどんな人間かを忘れてしまっていないだろうか。

しかし雅成の気持ちは複雑であった。彼女に指図できるほど、自分は優れた人間ではないのだ。ひどく平凡な、いやそれ以下の一高校生に過ぎない。麻希の将来に口を出す資格なんて、これっぽちも持ち合わせてないからである。

自分の出る幕ではない、か。

雅成は二度続けて大きなクシヤミをした。風邪を引いたら大変である。慌てて布団を顔まで持ち上げた。

麻希は大丈夫だろうか。体調を崩していなければよいのだが。

いよいよ文化祭当日を迎えた。

雅成は今回ほど、時のうつろいを意識したことはなかった。今までは、川に落ちた一枚の木の葉のように、流れに身を任せているばかりだった。自らがその流れと反対に泳ぐなんて思いも寄らないことだった。

しかし今度ばかりは違う。コンサートに出場することになり、いや正確に言えば、麻希と関わることになって、初めて真剣に時間と向き合った。

時は無情にも、人を待つてはくれない。

ギターの練習時間がもつと欲しかった。自分の技量をさらに磨きたかった。少しでも彼女に近づきたかったのだ。まだ時間の猶予が与えられるのであれば、死にものぐるいに練習して、さらに高見へ上り詰める自信がある。

麻希との関係もそうである。彼女は雅成が初めて好きになった女性である。その彼女にもつと心を開いてもらいたかった。しかしもはや時間切れである。

時は何と無慈悲なものだ、と思う。

しかしそれを言ってみても始まらない。今は自分をありのままに表現できればそれでよい。今、ここに生きている自分が全てなのである。

コンサートを成功させようと思う。

今ここで最大の力を出し切ろう。ギターの腕前はこの際問題ではない。彼女の歌の邪魔にならなければそれでよい。

このコンサートは、麻希のためにある。彼女の歌声を学校中に響かせて、彼女の存在を全校に正しく認知させること、それが雅成の最大の目的である。

そしてコンサートが無事終わったら、麻希に自分の気持ちを素直に伝えよう。

彼女の反応はまるで予想もつかないが、このまま別れるのだけはどうにも我慢できない。

麻希の前では積極的な自分でいたい、雅成は強くそう思う。

一晩おいても、ギターケースはまだ乾き切っていなかった。それでも雅成はギターを押し込んで家を出た。

日差しが眩しかった。見上げると、抜けるような青空がどこまでも大地と競い合っている。

空は遥か遠くの世界まで続いているようだ。麻希の歌声が今日、この大空に吸い込まれていくのだ、と考えた。一方、自分はそんな彼女の引き立て役に過ぎない。でもそれで十分だ。ちっぽけな自分がどこまで彼女の力になれるのか、今日はそれを試す日でもある。

麻希が芸能界で成功を収めて、広く名前が知れ渡ることになったらどうなるだろうか。今日コンサートに居合わせた学生たちは、デビュー前の彼女の貴重な歌声を聴いたのだと、後に自慢することになるだろう。雅成はそんなことを考えて、一人笑みを漏らした。

いつもと同じように教室の扉を開けた。ギターケースを少し持ち上げ気味に、やや時間を掛けて自分の席まで辿り着いた。

今日は文化祭一色で、授業はない。よって教室内の生徒は皆、笑顔である。

雅成の隣の席はぽっかりと空いたままだった。まだ麻希は来ていなかった。

生徒が続々と座席を埋めていく。そんな中、隣の席だけ時間が止まっているかのようだった。

春、最初に麻希と出会った日のことを思い出した。

あの日も、この座席だけが空いていた。

あれからどれくらい時間が流れたのだろう。彼女はどれだけ心を

開いてくれたことだろう。

雅成は今朝彼女は少し早めに登校するだろうと考えていた。コンサート最終打ち合わせもある。何よりパートナーと意気を合わせおくことで、一人では抑え切れない緊張を解きほぐすことができる。

しかし麻希は現れなかった。

雅成は途端に心配になってきた。彼女はまさか来ないというのではないだろうか。

昨日の一件で、学校に嫌気がさしたということは考えられないか。麻希はまもなく芸能界に入ろうかというほどの人物である。それほどの歌声を、こんな学校の生徒に聴かせる義理はない、彼女はそんな結論に至ったのではないか。

いや、そんな筈はないと思う。

麻希一人が舞台上に上がるわけではない。パートナーがいるのだ。それを彼女があっさり忘れる筈はない。

昨日、彼女は別れ際に、「頑張ろう」と言った。作り笑顔ではあったが、確かにそう雅成は聞いた。

もし彼女が来ないのなら、それは雅成に対する最大の裏切り行為となるのではないか。

しかし、これまで考えてもみなかったが、その可能性もないとは言えないのだった。麻希が雅成のことを、忌まわしき学校の一分子だと思っているならば、おかしいことではない。

もとより友達のいない彼女が、文化祭を休んでもそれは不思議なことではない。

雅成は、空っぽの席を見ながらそんなことを考えた。

心が締め付けられるように苦しく、もはや居ても立ってもいられなくなっていた。

チャイムが鳴って、担任が教室に入ってきた。

教師は一日の注意事項を話しているのだが、誰一人真面目に聞く者はいなかった。今にも教室を飛び出していきたい衝動と戦っている。

そんなホームルームも簡単に終わってしまった。

教師から解放されて、生徒たちは弾かれたように教室を出ていく。それでも麻希は姿を現さなかった。

彼女は どうしてしまったのだろうか。雅成の心配はピークに達していた。

もしかすると、昨日の激しい雨に打たれて、体調を崩してしまったのではないだろうか。もし彼女が自宅で寝込んでいるとしたら、コンサートどころではない。出場を辞退して、今すぐにも彼女の所へ飛んでいかなければならない。

「あいつ、人前で歌うのが怖くなったんじゃないか」

「それで逃げ出したのかな？」

教室を立ち去る男子生徒の中から、そんな声が聞こえた。

雅成は反射的に声のした方を睨みつけた。が、生徒たちは笑い声だけを残して、さっさといなくなってしまった。

誰もいなくなった教室で、雅成は一人椅子に座っていた。

窓からは、文化祭の華やかな飾り付けや、その中を忙しそうに動き回る制服姿が見下ろせた。

校門付近は、外来者が押し寄せている。

いよいよ文化祭が始まったのである。

校内の生徒誰もが、心を弾ませているにちがいない。今、不安と戦っているのは、きっと雅成ただ一人であろう。

さて、どうしたらよいだろうか。とにかく麻希に電話を試みようか。

その時である。

教室の扉が控え目にするすると動き出した。

扉が半分ほど開くと、そこに麻希の姿があった。

身体をくの字に折り曲げるようにして、やっと立っていた。どうやら自立するのが辛いのか、扉にもたれ掛かるように身体を支えている。

まるで熱い風呂から出たばかりの、朦朧とした様子であった。

いつもの麻希ではないことは明らかだった。

「麻希！」

雅成は慌てて駆け寄った。机と机がぶつかり合って大きな音を立てた。

「遅くなつて、ごめんなさい」

麻希は喉からひねり出すように言った。

そんなことはどうでもよかった。どう見ても彼女の身体は正常ではない。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

蚊の泣くような声。よく聞き取れない。

雅成のすぐ目の前の彼女の顔は紅潮していた。目もうつろだった。

「熱があるんじゃないか？」

雅成は思わず麻希の額に手を当てた。

やはり、微熱を感じる。

「とりあえず、保健室へ行こう」

この提案に麻希は何も言わなかった。

雅成は彼女の肩を抱えるようにして、廊下を歩き出した。

廊下を延々と彩る派手な飾り付けも、今の雅成には何も訴えかけてこなかった。途中、賑わしい生徒らと何度かすれ違った。

相当な時間を掛けて、二人は保健室まで辿り着いた。

幸いにも校医が居てくれて、麻希に必要な処置をしてくれた。

「しばらくベッドに横になっているといいわ」

麻希にそう言い残して、校医はカーテンを閉めた。

そして雅成の所までやって来た。

「先生、大丈夫ですか？」

「大丈夫よ、ただの風邪だから。ただ引き始めは、ちょっと辛いだけ」

若い校医は雅成を安心させるように、口元に笑みを浮かべた。

雅成は心の重圧からゆつくりと解放されていく感じがした。

「もう行つていいわよ。後は私に任せて頂戴」

「いや、彼女の傍にいてやりたいので」

雅成は慌ててそう言った。

「あら、でも今日は文化祭よ。あなたも色々と見て廻りたいでしょう？」

「特に予定はないですから」

「そう？」

校医は少し驚いたようだった。

雅成は今日のコンサートの出場を辞退するつもりでいた。麻希がステージに上がれない以上、参加しても意味はない。

二人が笑い者になるかもしれないが、そんなことは気にならなかった。

それよりも麻希の容態が心配である。

雅成は麻希と同じ部屋で、カーテン一つ隔てて静かに座っていた。

14

麻希は軽い寝息を立てて、カーテンの向こうで眠っているようだった。

雅成はその場から離れることなく、彼女のことだけを考えていた。篠宮麻希、つくづく不思議な少女だと思う。

彼女自身、真面目に生きている。自分の才能を生かすべく、この歳にして将来のことを真剣に見据えている。彼女には夢がある。それに向かって突き進んでいる。

しかし不幸なことに、彼女を取り巻く環境は、そんな彼女を暖かく見守ってはくれないようだ。ただ一生懸命に生きる彼女を放っておいてやればいいものを、その才能ゆえに嫉妬するのか、はたまた強気とも取れる性格が気に入らないのか、足を引っ張ろうとする。

雅成はそんな悲運を背負いながら生きる麻希に、共感できる部分がある。

どうして学校は、人を型に嵌めようとするのか。彼女のような生き方があってもよいのではないか。

麻希には強く生きてほしいと思う。彼女には歌という才能がある。それを芸能界で開花させるには、今以上に強靱な体力、精神力が必要になるだろう。

他人の中傷や嫌がらせに己の精神がねじ曲げられるようでは、アーティストとして心許ない。

雅成はそう思うのだ。

どのくらい時間が経過したのだろうか。突然カーテンの奥で身体が動く気配がした。

どうやら麻希が目を覚ましたらしい。

カーテンが細目に開いた。

そのわずかな隙間から、麻希はこちらを窺っているようだった。

雅成の視線が、麻希の視線を掴んだ。

すぐさまカーテンが力強く開かれた。

「雅成くん」

かすれた声がそう呼んだ。

「麻希、まだ寝てればいいよ」

雅成は優しく声を掛けた。

「コンサートはどうだったの？」

麻希は慌てるあまり、言葉がもつれたようだった。ベッドから降りようとすする。

雅成はそれを手で制止しながら、

「またの機会にすればいい」

自分でそんなことを言っておきながら、まもなく学校を去りゆく麻希に、果たしてそんな時間があるのだろうか、そう考えた。自分の言葉に確信が持てなかった。

でも彼女を安心させるために、そんな言葉しか思いつかない。

「まだ間に合うんでしょ？」

麻希はなおも続ける。

「ああ、まだ始まってないからね」

「だったら出ましようよ」

「その身体じゃ、無理だ」

雅成は叱りつけるように言った。そうでもしないと、彼女が諦めそうもなかったからである。

「お願い、私はあなたと舞台に立ちたいの」

麻希の声は上ずっていた。どうやら涙混じりになっていた。

「いや、今回は辞退しようよ。君のその身体じゃ無理だ」

「少し横になったら、随分と楽になったわ。だから大丈夫」

麻希は背中を丸めるようにして懇願した。まるで小さな愛玩動物を思わせた。雅成の心は揺れ動く。

「私は歌りたいの！」

麻希は一段と大きな声を上げた。

雅成には激しく迷いが生じた。

今の調子からいけば、とてもじゃないがいつもの爽やかな歌声が出せるとは思えなかった。おそらく舞台に立っているのがやっとではないだろうか。

どうしてそこまで学校のコンサートに拘るのか。麻希の真意が計りかねた。これはオーディションでもなければ、仕事でもない。単なる余興である。身体を犠牲にしてまで、やらなければならぬ種類のものではない。

保健室は、一瞬静寂に包まれた。

さつきから二人のやり取りを見ていた校医も、麻希の激しい様子に圧倒されたようだった。少し離れた場所から傍観を決め込んでいる。

「君には悪いけど、今の状態じゃ、まともに歌は唄えないよ」

雅成はわざと落ち着いた声で彼女を諭した。

麻希は途端に顔を両手で覆うと泣き出した。時に嗚咽を漏らした。雅成はどうすればよいか分からなくなっていた。泣きたいのはむしろ彼の方だった。

「分かった、分かったよ」

麻希の肩に手を掛けて、軽く揺するようにした。

彼女がこれほど取り乱しているのを、雅成は初めて見た。

人前で、いやたかが全校生徒の前で歌うことが、麻希にとってそれほど大事なことなのか。それは歌手の卵でもある、彼女の意地と
いうのか。

麻希は肩を上下に揺するようにして泣きじゃくっている。

もはや雅成の声も聞こえていないようだった。

「麻希、もう泣くなよ」

そう言いながら、辛い気分になった。麻希の身体を心配しているが故に決めたことが、彼女は気に食わないらしい。互いの気持ちですれ違っていた。それがもどかしく感じた。

雅成は助けを求めるように、若い校医を見た。

「演奏時間はどれくらいなの？」

彼女は冷静に訊いた。

「四分ほどです」

「それじゃあ、舞台には一応、椅子を持って上がりなさい」

「彼女は大丈夫でしょうか？」

「声がまともに出るかどうかわからないけど、どうしても言うなら仕方がないわ」

「はい」

「それから、歌う前に観客に一言、断りを入れておいた方がいい

わね。彼女が風邪にかかって、今日は本調子ではないです、って
校医は呆れた顔をしながらも、心配してくれていた。

第十一部

15

麻希の意志は固かった。

今彼女の身体を動かしているエネルギーとは一体何であろうか。一人立っているのがやつの身体で、何をしようと言うのか。雅成は少々戸惑いを覚えた。

それでも、それが麻希の望みと言うのなら、無理に引き留めはない。雅成は麻希と一緒にコンサートの舞台に立つことを決心した。しかし今の彼女の状態では、思うように声が出せないかもしれない。

その点は校医の提案した通り、事前に麻希の体調不良を表明しておけば、聴衆の理解も得られると思われる。何しろ彼女はプロの歌手を目指すほどの人物なのである。今回大目に見てもらうのは、それほど無理な注文ではないだろう。

むしろ問題は、自分のギター演奏である。こうなった以上、彼女の分まで頑張らなければならない。

雅成は、自分の責任の重さに実感が湧いて、足が震え始めた。しかし、やり遂げなければならない。

彼女の前で、雅成は不安な素振りを少しも見せないようにした。

「麻希、本当に大丈夫かい？」

雅成は彼女の顔をのぞき込むようにして、もう一度訊いた。それは最後の確認だった。

麻希は何も言わずに、ただ二度、三度頷いた。

「それじゃあ、ちよつとここで待ってる。教室に戻って、ギターを取ってくる。」

雅成はそう言い残して、保健室を飛び出した。

廊下に出ると、文化祭の賑やかな雰囲気が一気に押し寄せてくる。

保健室がこの校内で唯一、隔離された空間であることに気づかれる。

笑顔ではしゃぐ学生たちを縫うようにして、雅成は先を急いだ。誰もいない教室の扉を開いて、ギターケースを担ぎ上げた。南に面した窓から体育館が望める。エレキギターやドラムが織りなす立体音響が、空気を伝わって耳に届いていた。どうやらコンサートは始まっているらしい。

教室を出たところで、友人の東出と鉢合わせになった。

彼は息せき切って、ようやくここへ辿り着いたという感じだった。

「おい、今までどこにいたんだ？」

彼はいきなりそんな言葉を浴びせた。

「もうコンサートは始まっているんだぜ」

「これから行くところだよ」

「ところで篠宮さんはどうなんだ、ちゃんと来てるのか？」

どうやら同じクラスの誰かから彼女のことを聞いたらしい。

「ああ、ちゃんといるよ」

雅成は安心させるように、わざと落ち着き払って答えた。

「そうか、それならいいんだ。とにかく急ごう」

二人は並んで階段を下り始める。

「実は、篠宮さんが退学になる、って噂を聞いたんだが」

そんな東出の言葉に、雅成は思わず足を止めた。

「どういうことだ？」

「何でも校内でタバコを吸っていたところを目撃されたらしい」

「そいつはデタラメだ。誰かが彼女を陥れようとしてるだけだ」

雅成の強い声が廊下に響き渡った。必要以上に大きな声は、弱気な自分に渴を入れているのかもしれない。

「実はな、お前も一緒に吸っていた、って言いふらしている奴もいるんだ」

馬鹿馬鹿しい話である。まったくもって事実無根である。反論する気にもなれない。

「友人として訊くが、本当に彼女は信用できるんだな？」

「いい加減にしろ！」

雅成は東出を怒鳴りつけていた。

その言葉に学生や父兄たちが凍り付いて、遠巻きに二人に目を向けた。

そんな周りを気にするように、東出は小さな声で、

「とにかく、彼女の評判はよくないってことだ」

それだけ言つと、階段を先に下り始めた。

雅成は愕然とした。

一体誰がそんなデマを流しているのか。

まさに見えない敵である。相手が人間ならば、戦う策もあるだろうが、風に乗ってやってくる噂が相手では、戦いようがない。

「お前は、麻希と会つただろ？ 彼女の歌声を聴いただろ？ 悪い奴に見えたか？」

雅成は東出の背中に問いかけた。

「いや」

彼は振り返ることなく答えた。

「彼女は今日、本当に来ているんだな？」

東出は不安を隠せない様子である。

「当たり前だ」

雅成は口を開くのも面倒だった。今は麻希のことをあれこれと話す気分ではなかった。

そして思い出したように、

「これを持って、先に体育館へ行つてくれないか？」

そう言つて、ギターケースを手渡した。

「分かった、すぐに来てくれ。いいな？」

東出はそう念を押すと、廊下を駆けていった。

雅成は向きを変えて、保健室へ向かった。

扉を開けると、麻希はベッドに腰掛けて、校医と話をしていた。朝の様子と比べると、随分元氣を取り戻したように見える。

雅成は麻希の顔をまじまじと見た。

まだ熱が残っているのか、顔がほんのり赤かった。しかし何とか舞台上に立っているくらいならできそうだ。

そう思った瞬間、雅成の目には麻希の姿が霞んだ。

なぜか、自然と涙が湧いていた。それを麻希に悟られないよう顔を逸らした。

麻希にとつて、このコンサートに出ることは本当に意味のあることなのだろうか。学校中に悪い噂が流されて、生徒たちから忌み嫌われて、それでも人前で歌おうとするのか。これでは麻希があまりにも可哀想すぎる。

このまま二人で逃げ出してしまいたい衝動にかられた。

もしそれができるのなら、どれだけ気が楽になるだろう。

「ちよつと強い薬を飲んだから、眠気が襲ってくるかもしれないけど、頑張つて」

校医はそんなふうに麻希を送り出した。

「体育館まで歩けるかい？」

彼女の横で訊いた。

「大丈夫」

雅成は彼女に寄り添うように、賑やかな廊下へと踏み出した。

二人は赤や黄色で彩られた廊下をゆっくり歩いていった。

麻希の手や顔から、異常な熱気を感じる。ブラウスがしっとりと濡れていた。まるで滝のように全身から発汗しているようだった。

麻希の足取りは重く、時に長い足が絡み合つてバランスを失う。

その都度、雅成が支えてやらなければならなかった。

文化祭に沸く校内の生徒たちから見れば、今の二人はひどく不可解な行動をしているに違いなかった。

その証拠に、好奇に満ちた視線が何度も二人に向けられた。しかし雅成は少しも動じることはなかった。

今はただ麻希の傍で、彼女の力になつてやりたい、そんな気持ち

だった。

校舎を出て、渡り廊下を行くと、頭上には大空が広がっていた。青い空が白々しく感じられる。どうして雲一つないこの空は果てしなく青いのか。雅成はそれが憎らしくてたまらなかった。

楽曲が一つ終わる度に、観客の声援や拍手が響き渡っていた。さつきから体育館はずっと見えていたのに、なかなか辿り着くことができないのだった。

ここへ来るまでに雅成は何度歩くのを止めようとしたことか。コンサートの出場を辞退できるなら、どれほど楽だろうと何度も考えた。

しかし麻希は必死だった。自分から身体を引きずって、少しでも前に進もうとしていた。決して立ち止まらなかった。そんな彼女の強い意志に、雅成はここまで引つ張られてきたと言ってもよい。

体育館の外では、東出が待つてくれていた。

すぐに麻希の異変に気がついて、慌てて駆け寄ってきた。

「篠宮さん、どうしたんだい？」

東出は訳が分からないといった顔で、雅成の方を見た。

「ひどい風邪なんだ。俺は止めたんだけど、彼女がどうしても出場したい、って」

「でも、これじゃ無理だろう」

「私、歌います」

麻希の声が震えた。

保健室からここまで来るのに、相当体力を消耗した筈だった。今や彼女は身体全体で呼吸していた。

東出はそんな麻希の気迫に圧倒されたのか、もうそれ以上口を出さなかった。

「まだ、間に合うのか？」

東出に訊いた。

もし自分たちが出演時間に遅れたのであれば、それでもいいと思っていた。麻希には申し訳ないが、これで彼女を舞台に立たせなく

て済む。彼女の醜態を全校生徒の前で晒したくはない。

「ぎりぎりセーフだ。君たちの番はこの次だ」

東出の言葉が無情にも響いた。

どうやらこれが、篠宮麻希と自分に与えられた運命らしい。

最悪のコンディションになってしまった。こんなことになるなら、彼女にコンサートの話を持ち掛けるのではなかった。雅成は、後悔の念が後から後から吹き出した。

二人は舞台裏へ回った。

そこには出番を待つ学生たちの姿があった。誰もが緊張を隠せない様子である。知らぬうちに楽器を持つ手に力が入っている。雅成もそんな仲間に加わった。

二人の姿を見つけて、スタッフの一人がヒステリックに声を上げた。

「どこに行つてたんだ、遅刻だぞ！」

片手に握られたストップウォッチが、薄暗い蛍光灯の明かりでチカチカと反射した。

雅成はその無遠慮な言い方に怒りを禁じ得なかった。一歩前に出ようとしたところに、麻希の身体が割り込むように入ってきた。

彼女は雅成を制止する。そして、

「どうもすみませんでした」

とスタッフに頭を下げた。

「次の準備があるんだ、しっかりしてくれよ」

彼の怒号が飛ぶ。彼もコンサートを成功させようと必死なのだ。

この舞台裏は、少々声を張り上げても客席には届かないようだった。舞台での演奏が壁となって、こちらの音を遮断しているからである。

雅成は緊張よりも、無神経な言葉を投げかけたスタッフが腹立たしかった。自分ことはともかく、麻希の名誉のためにも、一言言い返さないと気持ち収まらなかった。

そんな雅成の態度に気がついたのか、麻希は、

「何も言わないで、お願い」

そんな小さな声を出した。

「本番一分前です！」

舞台の袖から別のスタッフの声が響く。

「二年生の芹沢さんと篠宮さん、スタンバイしてください」

雅成は麻希の小さな手をぎゅっと握りしめた。

16

雅成と麻希は舞台裏でひっそりと並んで立っていた。

表舞台からは、エレキギターが生み出す激しい音とボーカル、そして観客の歓声が入り交じって聞こえてくる。

雅成は意味もなく、天井を見上げた。

こんな薄暗い空間にも、天窓から光が差し込んでいる。その白い光の中で、細かいほこりが舞い上がっていくのを、雅成は見た。

自分たちは天に召されるのだ。いや、その前に、まずは裁きを受けなければならぬ。

これまで学園で目立たぬように暮してきた二人が、今大舞台に立ち、生徒達の心に語りかけようとしている。果たして、そんなことが許されるのだろうか。

自分を落ち着かせようとすればするほど、逆に心は高ぶってくる。今まで経験したことのない緊張が、雅成を押しつぶそうとする。

手のつながった麻希にそれを悟られないようにするのに、雅成は一生懸命だった。わざと胸を張り、堂々たる姿で立っていた。しかし見えない震えが足元から伝わってくる。

舞台に立つこと、人前で歌を唄うこと、それは何と度胸のいることか。さらに観客を満足させることなど、自分には思いも寄らない。しかし目の前のこの少女は、これから芸能界を生きていく。彼女は日々それを繰り返していくことになるのだ。

この際、自分はどうでもよかった。麻希が正しく評価されれば、それでいい。

雅成は麻希の顔を窺った。薬が効いてきたのか、眠い目をわざと見開くようにしている。顔の火照りだけはどうやら引いたようだった。

「麻希、いよいよ出番だね」

雅成はつぶやいた。

「はい」

麻希が答える。この様子なら、何とか行けそうだ。

今舞台では、前の組の演奏が終わったところだった。まだエレキギター之余韻も冷めやらぬ体育館は、観客の拍手、歓声によって満たされていた。

いよいよ、自分たちの番である。

楽器を抱えたメンバー達が、舞台裏に引き揚げてきた。どの顔もみな興奮している。誰もが陶醉しているようだった。

「芹沢さん、篠宮さん、ステージへ出てください」

スタッフの声が轟く。

「はい」

雅成は返事をする、麻希の手を引いてステージへと踏み出した。麻希は足がもつれそうになりながら、雅成の後に続く。

二人を何百という観客が待ち受けていた。体育館の端から端までぎっしりと埋め尽くされた生徒たちの視線は、今や自分たちだけに向けられている。もう後戻りはできない。やれることをやるだけだ。不思議と場内は水を打ったように静まりかえっていた。先ほどまでの喧騒が嘘のようだった。

雅成は麻希の手を離すと、アコースティックギターを構えた。マイクの高さを調整する。

麻希の方をちらっと見た。彼女はマイクにもたれかかるような姿勢で、何とか一人で立っている。

彼女は最後まで立っていられるだろうか。雅成の脳裏に不安がよ

ぎる。

雅成はマイクに手を掛けて、番号と名前を告げた。極度の緊張が声を震えさせる。会場の一部から笑い声が漏れた。

続いて麻希も名前を口にした。

どこかで心ない者の罵声が上がった。

「すみませんが、今日は篠宮さんは風邪を引いていて、本調子ではありません。それでも一生懸命歌いますので、どうかよろしくお願いします」

雅成の声に会場がざわつき始めた。

そんな淀んだ空気を一掃するかのようになり、雅成はさっさとギターを弾き始めた。

マイクを通して、ギターの乾いた音色が体育館に拡声する。目の前の小さな楽器が、自分の手の動きに合わせて、身体を震わせるほどの大きな音で鳴っていた。

それは会場を埋め尽くす観客の耳へと届いている。彼らの感覚に働きかけているのは、他でもない自分が奏でる音である。そんな当たり前のことに思い至ると、事の重大さに恐怖感が生まれた。それは一瞬のうちに増殖し、身体を自由を奪い去る。

雅成は演奏をしながらも、どこか違和感を覚えていた。何かがいともと違う。これまで同じ曲を何度となく弾いてきたが、これほど不安に満ちていたことはなかった。

果たして、麻希の方はどうだろうか。こんな無粋な伴奏に、うまく歌声を重ね合わせられるのだろうか。

身体が硬直して、麻希の様子を窺い知ることできない。心のゆとりがまるで消えていた。今このギターを弾いているのは、誰かも分からなくなってくる。

いよいよ、麻希の歌声が合流する。

いつもとはまるで違う声だった。雅成には別人の声に聞こえた。あの透き通るような爽やかさが微塵も感じられない。

口先から不明瞭な歌詞だけが流れて来る。音量は一定ではなく、時に途切れ途切れになった。

もうこれは麻希の歌ではなかった。川で溺れた子供が、必死に助けを求めているようだった。

雅成は絶望的な気分に襲われた。やはり麻希をこの舞台に立たせたのは間違いだった。後悔の念が一気に押し寄せた。

今すぐにでもギターを弾く手を止めたい衝動にかられた。しかしそれでも麻希は一生懸命に歌っている。伴奏を止める訳にはいかない。

今、麻希の声が一瞬裏返った。もはや彼女には表現力などなかった。操縦不能に陥った飛行機が、ただ力任せに空を行くようだった。自分で声を調整することすら難しくなっている。

サビの部分で、麻希は咳き込んだ。雅成のギターに不快な音が混入した。もうこれは歌とは言えなかった。それでも彼女は歌うのを止めなかった。

会場は騒然となっていた。どうやら嘲笑や野次が入り交じって、体育館は揺れているようだった。いつからそうになっていたのか、雅成は麻希のことばかりに気を取られ、今まで気づかなかった。

ギターの伴奏からリズム感が失われていく。まるで今にも消えてしまいそうな口ウソクの炎が、最後のあがきで揺らめくように、メロディが浮ついていった。

雅成は麻希のことだけが心配だった。やはり彼女をこの舞台に立たせるべきではなかった。完敗だと思った。

もう会場は怒号だけに支配されていた。誰も静かに歌を聴いている者などいない。生徒らはまるで暴徒と化したようだった。

一人ひとりの叫び声が、何を言っているのかはつきりとは聞き取れない。しかし体育館を支配するほど膨れあがった凶暴な声は、容赦なく雅成に牙をむいていた。身の危険すら感じる。

次の瞬間、突然麻希の身体がぐにやりと折れ曲がり、ステージの上で転げ落ちた。会場の喧騒のせいで、彼女の倒れる音が雅成には

まるで聞こえなかった。

いつの間にか、彼女の声が聞こえなくなっていた。気がつくとき、麻希の身体がだらしなく倒れていたのだ。

会場は予期せぬ出来事に静まりかえった。一体何が起きたのか、誰にも分からないようだった。観客は啞然として、ステージを見守るしかなかった。

雅成はギターを放り出して、彼女の元に駆け寄った。

自分の足音だけが、妙にはっきりと聞こえた。

「麻希、大丈夫か？　しっかりしろ」

麻希はぐったりとしていた。意識がないように見えた。

舞台裏からスタッフが飛び出してきた。

麻希の身体は異常なほどの熱を帯びていた。彼女の傍に寄るだけで、その熱気は雅成の身体にまわり付くほどだった。

麻希は薄目を開いて雅成の顔を確認すると、口元をゆっくりと動かした。しかし声はまるで出なかった。

それでも口の動きから、「ごめんなさい」と読み取れた。

（どうして君が謝るんだ？）

むしろ謝るべきは自分の方である。こんなことになるなら、彼女をコンサートに誘わなければよかった。

大勢のスタッフが二人を取り囲んだ。そして互いに顔を見合わせた。予想もしなかった事態に戸惑いを隠せない様子だった。

「とにかく保健室に運ぶんだ」

舞台の裏から主催者の声が飛んだ。

「そうだ、そうしよう」

その声に促されるように、スタッフの作る円陣は小さくなった。輪の中心にいた雅成は、麻希を抱きかかえるようして立たせた。しかし彼女の足はおぼつかなかった。

一度彼女を肩に担ぐようにして、背中に負ぶった。麻希の手が雅成の首にしっかりと巻き付いた。

「一人で大丈夫かい？」

すぐ横でスタッフが訊いた。

「手伝おうか？」

続いて周りからも声上がる。

「結構です。この方が楽ですから」

雅成は身体をまっすぐ伸ばしてそう言った。それから二、三步し
っかりした足取りで歩いて見せた。

人垣が一カ所だけ開いた。そこから舞台裏へと向かう。不思議と
自分の心は落ち着いていた。

観客席を背にして歩き出すと、体育館がざわめいていることに、
ようやく気がついた。

彼らは麻希と自分の姿を見て、笑っているのだろうか、それとも
突然の出来事に驚いているのだろうか。雅成にとって、そんなこと
はどうでもよかった。今は麻希の身体を落とさないように歩くこと
で精一杯だった。

耳元で麻希が喘ぐように呼吸をしているのが分かる。彼女と接触
している背中が汗ばんでくる。

「麻希、もう少しの辛抱だ。頑張れよ」

雅成は前を見据えたまま、声を掛けた。その声は彼女に届いてい
ないのかもしれない。しかし雅成は構わず、言葉を掛け続けた。む
しろそれは自分自身に言い聞かせているのかもしれないかった。

体育館から保健室までは、かなりの距離がある。しかし雅成は無
我夢中で、一体どうやって歩いてきたのか、まるで記憶がなかった。
途中廊下で、人々の好奇の視線が二人を捉えて離さなかった筈だが、
そんなこともまったく気にならなかった。

気がつくやうに雅成は保健室の前で、麻希を背中に抱えて立っていた
のだった。

第十二部

17

保健室には運良く校医が居てくれた。雅成と麻希を一目見ると、顔色一つ変えることなく、早速自分のやるべき仕事に取りかかった。麻希の長身を雅成から受け取るようにして、手際よくベッドの上に横たえた。ひよつとしてこの校医は麻希のことが心配で、ずっとここに詰めていたのかもしれない。雅成はふとそんなことを考えた。白いシャツの中で、麻希の真っ赤な顔だけが生々しく感じられた。まるで魚のように口を動かして、身体全体で呼吸している。やはり彼女は朝からずっとここににいるべきだったのだ。雅成に後悔の念が沸いた。

校医はカーテンを閉め切ると、麻希の服を着替えさせているようだった。それから何度か出入りを繰り返し、適切な処置を施した。その間、一言も喋らなかつた。

しばらくして校医はカーテンの隙間から身を滑らせるように出てきた。どうやら一段落ついたらしい。

「麻希は大丈夫ですか？」

雅成がすかさず訊く。

「大丈夫よ、しばらく寝てればよくなるわ」

「病院に連れて行かなくてもいいんですか？」

「それほど大げさなものじゃないわ。風邪の引き始めで、どっと熱が出ただけ。随分と無理をしたようだから、意識が遠のいたのね」雅成を安心させるためか、校医は終始ゆつくりとした口調だった。不安が完全に消えた訳ではなかったが、今は校医の言葉が心強かった。麻希に、もしものことがあったらどうしようと、そればかりを考えていたのだ。やっと傍の丸椅子に腰掛ける気になった。

「一応、ご家族には連絡しておいた方がいいわね」

彼女はタオルで両手を拭いながら言う。

「あなた、彼女の自宅の電話番号は知ってるの？」

「いいえ」

双子の姉のことが思い出された。姉は今自宅に居てくれるだろうか。

「それなら職員室で調べて、私が掛けてくるわ」

「お願いします」

校医は外のドアを開けると、思い出したように振り返った。

「後のことは私に任せて、文化祭に戻ったら？」

「いいえ、ここに居ます」

雅成は考えるまでもなく、強い調子で言った。

「そう？」

彼女は口元に軽く笑みを浮かべると、それ以上何も言わずに保健室を出て行った。

中庭に面した窓から、ベースやドラムの入り交じった低音が漏れ聞こえてくる。

どうやらコンサートは再開したようだった。

観客たちは、歌の途中で麻希が倒れたことや、そんな彼女を背負って舞台裏に消えた男のことなど、もはやすっかり忘れているだろう。

二人はついさっきまで、本当にあの大舞台に立っていたのだろうか。この静かな部屋の中では、それすら雅成には信じられなくなる。実は全てが夢で、二人は今朝からずっとこうして保健室に隠れていたのではないか、そんな気さえする。

いや、やはりそんなことはあり得ないのだ。怒号の飛び交う中、確かに二人は舞台上がっていた。

そして麻希が倒れ、自分は彼女と逃げるように舞台を降りた。あの時はそうでもしなければ、全校生徒が今にも襲いかかってくるのではないかという不安に包まれていた。

確かにあの瞬間、二人は学校中の生徒を敵に回していた。冷たい視線、そして非難の嵐。あれが夢や幻であるはずがない。紛れもなくあれは現実だった。

全てが夢物語であってほしい。多くは望まない。何事もなかったかのように、これまで通りの学校生活が続いてくれればよい。そんな願望が無意識に自分の精神に幻覚をもたらしているのだ。

あれほど練習を重ねたというのに、二人の息はまるで合わなかった。その結果、全校生徒を前にして大失態を演じた。彼らとの溝は埋まるどころか、ますます深いものとなってしまった。

こんな筈ではなかったのだ。

昨日、麻希を取り囲んでいた女連中の顔がちらついた。雅成の耳には、彼女らのあざ笑う声だけが渦巻いている。

雅成自身のことはどうでもよい。今さら人に何と言われようと気にはならない。孤独でいることには慣れている。

問題は麻希の方である。彼女には歌の才能がある。この先芸能界を約束された彼女の歌声を、あの女連中を始めとする全校生徒に聴かせるためのコンサートだったのだ。

確かに日頃敵対する生徒たちに麻希の歌声を聴かせるのは、一か八かの賭けだった。しかし彼女の澄んだ歌声は、必ずやこれまでの誤解をすべて解いてくれるという勝算があった。

だが麻希の歌はまるで響かなかった。

それは「無言の歌」だ、雅成はそう思う。

日頃から麻希はみんなと距離をおいていた。彼女は人と交わることを避けていた。

それは彼女の性格がそうさせたのかもしれないし、あるいは学校を中退するつもりで、意図的にそうしていたのかもしれない。

いずれにせよ、彼女はいつも無言だった。

しかし、いよいよ学校を去る時、彼女は大舞台で全校に語りかける。その歌声は生徒一人ひとりの心の扉を開き、みんな麻希の存在を認めるようになる。それが雅成の描いたシナリオだったのだ。

しかし麻希は、無言の歌しか唄えなかった。

今雅成の心には、後悔の念ばかりが泉のように湧き出ていた。極度の自己嫌悪が襲ってくる。全ては自分の責任である。

麻希を無理矢理ステージに引っ張り出したのは、この自分なのだ。そのせいで、彼女がますます孤立する結果を招いてしまった。

麻希には何と声を掛けたらよいものか。雅成にはまるで見当もつかなかった。

彼女としても、実力を発揮できなかったことは不本意に感じているのではなからうか。もしそうなら、もう一度舞台上上がることはできないものか。ぜひとも麻希の歌声を校内に響かせてやりたい。自分にはいつだってギターを構える準備ができている。

これから厳しい芸能界へ進む彼女に、せめて学生時代の楽しい思い出を残してあげたい。

雅成はそんなことを一人考えていた。

どれだけ時間が流れたのだろう。

閉ざされたカーテンの中で、身体が動く気配があった。彼女が目覚めたのだろうか。

「麻希？」

雅成は椅子から立ち上がって、そつと声を掛けた。

「雅成君、ずっとそこに居てくれたの？」

奥からしわがれた声が聞こえた。

「具合はどう？」

雅成はカーテンに身体を張り付けるようにして訊いた。

「随分と楽になったわ」

白い手がカーテンの重なりを左右に押し分けて、そこに小さな隙間ができた。

雅成が思わず手を伸ばすと、麻希はその手をぎゅっと握りしめた。雅成は言葉を出せなかった。彼女の手の温もりを感じることで精一杯だった。なぜか大粒の涙がこぼれ落ちた。

雅成は空いた手で、ゆつくりとカーテンを開いた。

麻希は半身を起こして、雅成の方を向いた。ずっと泣いていたのか、目の周りがすっかり赤くなっている。

ベッドの上の彼女は、白い体操服に着替えていた。カーテンで仕切られた空間には、女性特有の強い香りが立ち込めていた。

麻希は握った手を離そうとはしなかった。むしろ力を入れるようにして、

「心配かけて、ごめんなさい」

と言った。

「いや、謝るのは僕の方だよ」

「どうして？」

麻希は揺れる瞳で雅成を見上げた。

「君に無理をお願いしたのは、僕だからだよ」

自分で言っておきながら、そんな言葉には、もはや何の意味も感じられなかった。ベッドに横たわる弱々しい麻希の姿を見て、今心の中には、まるで別の強い感情が芽生えていた。

いや、正確には今までのほのかな気持ち確信へと変わる瞬間。

他人にどう思われようと、コンサートが失敗しようと、そんなことはどうだっていいんだ。

今、麻希とこうして一緒に居られる、そのことが何よりも大事に思われる。いつまでも傍にいたいと思う。

そう、麻希のことが好きなんだ。君はそんな気持ちに気がついてくれるだろうか。

麻希はくすつと笑うと、

「あなたは優しいのね」

と言った。

握りしめていた腕をほどく。

「そうじゃないの。全ては私のせい」

雅成は何かを言おうとしたが、それを遮るように彼女は続ける。

「昔からそうだったの。私って不器用だから、ここの一番大事な時

に、必ず失敗しちゃうの」

「いや、そんなことはない。君は素晴らしい才能に恵まれている。僕からすれば、羨ましい限りなんだ。今回、身体の調子が悪かっただけだ」

雅成は慌てて言った。

「ありがとう。でも、もう励ましてくれなくてもいいの。自分のことは自分が一番よく分かってるから」

麻希はそんなふうに言った。

今回の一件で、彼女は自分の心を堅い殻で覆ってしまったようだった。もう誰が何と言おうと、心を開く準備はないように思えた。彼女の笑顔を取り戻すには一体どうすればよいのだろうか。雅成は頭を巡らせる。

「身体が治ったら、もう一度みんなの前で歌を披露してくれないか？」

「いえ、もういいの。これまでとっても楽しかった。あなたのおかげよ」

麻希は今回の失敗を機に、学校では自分の歌を封印するつもりでいるらしかった。このまま学校を去る気にいるのだろうか。

麻希への思いが強くなる。彼女のことを強く思えば思うほど、彼女は自分の手からすり抜けていくようだ。無力感ばかりが募る。こんな中途半端な気持ちのまま、麻希と別れてしまうのか。

「悔いはないのか？」

雅成はそんな言葉を口にした。自分の気持ちをよそに、芸能界を一直線に目指し始めた彼女の心を、何とか制止したい一心だった。

「うん、最初からこうなる運命だったのよ」

麻希は自嘲気味に笑った。

「色々あったけど、麻希は全然悪くないよ。これからみんなの前で堂々としてればいい」

雅成は強い調子で言った。それは間違いないと思った。少なくとも自分は彼女の味方である。この学校にいる間は、これからずっと

と守ってやる、そう心が叫ぶ。

しかし自分には、そんな安っぽい言葉で励ますことしかできないのだ。自分の不甲斐なさが、一気に身体を押しつぶしそうになる。優れた才能を持ち、将来の夢に向かって歩き出した麻希に、何の取り柄もない男が何を言おうと無駄である。説得力のかけらもない。しかし自分がかしなないと、彼女の自信は取り戻せないように思えた。このままでは彼女は暗い過去を背負って生きていく羽目になる。

「ごめんね、雅成君に余計な心配をかけて」

麻希は静かに言った。

「芸能界に進むことはもう決めているんだろ？」

「ええ、そうね」

「いつまでこの学校に居られるの？」

「本当はもつと早くに出て行くつもりだったんだけど、何だか居心地がよくなって、決心が鈍ったみたい」

麻希は思い出を辿るようにそう言った。

「僕にはこんなことを言う権利はないけれど、できればあと一年半、いや半年だっていい、麻希にはこの学校にいてもらいたいと思う」

「一年半？」

「そう、できたら一緒に卒業して、それから君について行きたいんだ。もしそれが無理なら、少しでも長く君の傍に居させてくれ」

「ああ、もうそれ以上は言わないで」

麻希が両手を前に突っ張るようにして言った。

「だって、悲しくなるじゃない？」

涙混じりの言葉が続く。

「いや、でも言わせてくれ」

雅成はその両手を左右から包み込むようにした。

「いつからか自分でも分からないけど、麻希のことが好きになっていったんだ。実はどこかでは君のことを意識していたけれど、今ま

で自分の気持ちがよく分からなかった。でも今日舞台に立ってばかりしたんだ。自分のことよりも、何より君のことばかりが心配だった。だから今、はつきりと言える。僕は麻希のことが大好きなんだ、って」

麻希はうつむいて雅成の言葉を黙って聞いていた。そして最後に弾かれたように顔を上げた。

「ああ、とうとう言っちゃった」

「えっ？」

「ううん、何でもない。でもとっても嬉しい。私もあなたのことが好きだったの、きつと」

雅成は突き上げてくる衝動を抑えることができなかった。自然と麻希の唇に自分の唇を重ねていた。

彼女の顔は火照っていた。それは猛烈な恥ずかしさからなのか、それとも風邪の症状なのか雅成には分らなかった。

唇をほどくと、雅成は、

「麻希のこと、大好きだよ」

と言った。

麻希は顔を真っ赤にしたまま、

「できれば、お互いもつと早く出会っていればよかったね」と笑顔で言った。

それは雅成が初めて見る美しい顔だった。彼女にもこんな表情があるのかと驚いた。

確かに入学してすぐ彼女と知り合っていたれば、お互い学校生活も違ったものになったかもしれない。

「でもその言葉だけは、もう少し取っておいてほしかったわ」

麻希はちよつと不満そうな調子で言った。

「どうして？」

「だってその方が、長く一緒に居られたもの」

麻希はおかしな事を言う。

「それ、どういう意味？」

「ううん、それはこつちの話」

麻希は笑った。

「さて、私はそろそろ戻らなきゃ」

「戻るって、家に？」

雅成はどうもさつきから麻希の様子がおかしいことに気づいていた。なぜか彼女は自分の元から今にも離れていってしまいそうだった。せつかく互いの気持ちを告白できたというのに。

麻希はベッドから両足を降ろした。

そして雅成の目の前をすり抜けて、ドアのところまで歩いていった。

彼女は自宅に帰るのだろうか。もしそうなら自分が送ってやらなければならぬ。

そんなことを考えて、麻希に何か言おうとしたその瞬間だった。

麻希は雅成の方を突然振り返り、

「今まで本当にありがとう。さようなら」

それだけ言うと、ドアを開いて廊下に消えていった。

「麻希！」

反射的に雅成は声を上げて、彼女の後を追う。今ドアの向こうには彼女の背中がある筈だった。

力強くドアを開けた。

しかし、麻希はそこにはいなかった。

廊下の左右を慌ただしく見回しても、彼女の姿はどこにも見当たらなかった。

あるのは、いつもと違った文化祭の華やかな飾り付けと、行きかう生徒たちの楽しそうな顔だけであった。

それは不思議な光景であった。

今、保健室を出ていったばかりの麻希の姿が視界から消えていた。あれから五秒と経っていない。当然雅成は、彼女の後ろ姿を捉えることができると思わなかった。

しかし実際には彼女の姿はどこにもない。何とも理解し難い現実であった。まさか人間が煙のように消えてしまう訳もあるまい。

雅成は背筋が凍るような恐怖感が湧いていた。麻希はどこへ行っ
てしまったのか。

確信のないまま、彼は廊下を駆け出した。彼女の姿は確認できないが、こうでもしなければ心を落ち着けることができない。このままでは説明がつかない。

この先は体育館である。さっき麻希を背負って歩いた道である。彼女の温もりが思い出される。

校舎内は今、文化祭一色である。しかし雅成にはまるでその様子は目に入らなかった。一刻も早く麻希を見つけたかった。もしこのまま見つけることができれば、何かとんでもないことになるような気がする。

のんびり廊下を歩く学生らを縫うように走る。もしかすると、麻希はどこか教室に逃げ込んだのかもしれない。そう思って、廊下の左右に目をやることは忘れなかった。しかし彼女が隠れていそうな場所はなかった。

いよいよ校舎の端まで到達する。中庭を通り抜ければ、その先は体育館である。しかし麻希の姿はなかった。

しまった、反対方向を探すべきだったか。

雅成は慌てて保健室の方へ引き返した。途中、階段を下りてきた女生徒二人とぶつかった。

「ごめん」

雅成は、悪態をつきながら姿勢を正す二人を尻目に走り続けた。足がもつれて転びそうになる。

保健室の前を通過して、その先を急いだ。

廊下は直角に折れて、この先は体育教官室や武道館で終わりであ

る。ここまで来ると、文化祭の飾り付けもなく、麻希どころか人の姿さえなかった。

静まりかえった廊下に雅成の靴音だけが響き渡る。

とうとう突き当たりの武道館まで来てしまった。扉に手を掛けてみたが、びくともしなかった。ここは元々鍵が掛かっているのだろう。この中に麻希がいるとは考えられなかった。

雅成は肩を落として今来た道に戻った。

麻希は一体どこへ消えてしまったというのか。

ほんの数秒の出来事なのである。彼女がその間に進める距離など、たかが知れている。絶対に遠くまでは行っていない。

保健室が見えてきた。

案外、今頃はあの部屋の中に戻っているのではないだろうか。それが正解のような気がする。いや、そうとしか考えられない。雅成にはかすかな自信が湧いてきた。

保健室まで戻ってきた。

扉を開こうとしたが、何かに引っかかった。鍵が掛かっているのだった。

やはり麻希は中に居る。中から鍵を掛けて閉じこもっているのだ。

「麻希！」

雅成は扉を叩いた。

「おい、開けてくれよ」

しかし扉は固く閉ざされたままであった。

麻希はどうしたと言うのか。何か気に障ることがあったのか。それとも自分の行動が彼女を怒らせたのか。

自分のしたことと言えば、彼女に告白をして、口づけをしたことである。やはりそれが彼女を傷つけ、心を閉ざすきっかけになったのだろうか。

「麻希、そこにいるんだろ？」

雅成は扉を叩き続けた。

「一体、どうしたの？」

あらぬ方向から女性の厳しい声を聞いた。振り返ると校医だった。雅成は一気に救われた気持ちになった。彼女なら鍵を持っている筈である。

「先生！」

「あら、あなただったの？」

校医は呆れたように言った。

「先生、鍵が掛かっているんです。開けてもらえませんか？」

雅成は勢い込んで言った。

「ああ、それは私が閉めたのよ」

「えっ？」

「戻って見たら誰もいなかったから」

「麻希は、篠宮さんはいませんでしたか？」

「シノミヤさん？ 誰のこと？」

校医は怪訝そうな顔で訊いた。

この非常時に何を言っているのだろうか。雅成はもどかしくなった。

「さっき僕がここへ連れてきた子、篠宮さんっていうんです」

雅成は説明する。

「コンサート中に倒れたんでしょ？」

「そうですよ」

雅成は憮然として言った。

すると校医は驚くべきことを口にした。

「倒れて運ばれてきたのは、あなた自身じゃないの」

雅成は言葉を失った。しばらく校医と睨み合う格好になった。

彼女の言った言葉が頭の中で渦巻いていた。必死にその意味を考え。が、壊れたカメラのように、いつまで経ってもピントが合わない。今、彼女の認識とは大きな隔たりが生まれている。このままでは、この先会話が成立しない。

「僕が倒れた、って言いました？」

何とか突破口を開きたいのだが、雅成にはそんな反芻がやつとだった。

「ええ、でももうすっかり元気になって、保健室を出ていったのだと思ってたわ」

なるほど、それで彼女は鍵を掛けたという訳か。

「とにかく、開けてくれませんか」

雅成は彼女の言葉を理解するのももどかしくそう言った。

「分ったわ」

この中には麻希が居る筈である。彼女に会うことが何よりも先決である。

校医は口を尖らせるような表情で鍵を差し込んだ。

ドアが開くと、雅成は飛び込むように突入した。

しかし静まりかえった部屋の中には誰もいなかった。雅成の大きな息遣いだけが響いている。

何度も部屋の中を見回した。狭い部屋である。人が隠れるような場所もない。さっき麻希が寝ていたベッドのカーテンは全開になっていて、そのベッドももちろん空だった。

雅成は助けを求めるように、後ろを振り返った。

「さつき、ここに篠宮さんが寝てましたよね？」

雅成は、腰に両手を当てている校医に向かって確認した。これ以上簡単な問題はない筈だった。麻希の看病をしたのは、彼女に他ならない。

「いいえ、寝てたのはあなたよ」

彼女のしっかりと口調は、雅成の期待をいとも簡単に裏切った。そんな筈があるものか。何を勘違いしているというのか。

「先生、しっかりしてください。ここには背の高い女の子が寝ていたんです。先生が手当てしたんですよ」

「いいえ、私はあなたの手当てをしたんです。女の子なんてここには来てないわ」

校医はきっぱりと言い放った。その顔は冗談を言っているように

は見えない。彼女は本当に麻希を忘れてしまったというのか。

そうだ、麻希の着替えた制服はどうしたのだろう。ベッド脇に置いてないだろうか。彼女はここを出る時、体操服姿だった。それなら最初に着ていた服がそのまま残っていることにならないか。

雅成はベッドに駆け寄って、その辺りを見回した。しかし彼女の服は見当たらなかった。ベッドの下を覗き込んだり、カーテンを何度か開け閉めして確認したが、麻希が寝ていた証拠は見当らなかった。

雅成の目の前には、自信に満ち溢れた校医の顔があった。

「何かの勘違いでしょう。この部屋にはあなたしかいなかった。

それに、そもそもシノミヤって子、私は知らないから」

悪い夢でも見ているようだ。どうして校医は麻希のことを隠すのか。

いや事実、麻希はこの部屋に居たのである。なぜかは分らないが、校医は明らかに嘘をついている。

彼女に真実を認めさせる確固たる証拠はないものか。

雅成はなおも食い下がった。

「先生は今までどこへ行っていたのですか？ 職員室で篠宮さんの家に電話を掛けていたのではないですか？」

今やすっかり思い出していた。自分と麻希を部屋に残したまま、電話を掛けてくると言って出て行ったのである。この点をどう説明するのか。

「だからあなたの家に連絡しましたよ」

「えっ？」

「でもお留守だったから、担任の先生と相談したのよ。そうしたら、夕方までこのまま様子を見ようということになって。ここへ戻ってきてみたら、あなたの姿がなかったと言っわけ」

雅成はもう何も反論する言葉が思いつかなかった。

校医は構わず続けている。

「でも、もう身体の方は大丈夫よね。それだけピンピンしている

んだから」

そう言つと彼女は笑顔を作つた。

雅成は怖くなって、この場を逃げ出したくなつた。そのうち自分まで記憶から消されても不思議ではない。

今は何よりも麻希のことが心配である。

雅成は無言で保健室を飛び出していた。

第十三部

麻希はどこへ行ってしまったのだろうか。

とにかく今は彼女に会いたい一心だった。もうこのまま会えなくなるのではないか、そんな不安に押し潰されそうになる。雅成は負けじと廊下を疾走する。

しかしどこへ行けば麻希と会えるというのか。当てのないまま、もがくように足は地面を蹴って進む。

保健室で無駄に時間を過ごしたことが悔やまれた。校医と話している間にも、麻希は自分から遠ざかっていったのだ。とつくに学校の外へ出ていったのかもしれない。

しかしあの校医は一体どうしてしまったのか。彼女は麻希のことを知らないと言った。代わりにステージで倒れたのは、この自分だと言いつ張った。

そんな筈はない。ステージで倒れたのは麻希である。そして彼女を保健室へ連れてきたのは、この自分なのである。目撃者だって大勢いる。

あんな戯言に関わっている暇があるなら、とつと麻希を追いかけていればよかったのだ。

これからどうしようか。麻希が校外に出てしまったのなら、これ以上校舎内を探しても無駄である。しかしそう決めつけてもいいのだろうか。

「おい、芹沢！」

背後から誰かが自分の名前を呼んだ。雅成は転びそうな勢いで急停止をして振り返る。

東出だった。目を丸くして立っていた。

「お前、もう大丈夫なのか？」

「何のことだ？」

雅成は悪い予感を抱かずにはいられなかった。

「さつきステージでぶつ倒れた時には、さすがに驚いたよ。今から保健室へ行こうと思ってたんだ」

不可解なことに、彼も校医とまったく同じことを言った。反論が面倒に思われて、それには答えず、

「麻希を見なかったか？」

と訊いた。

「マキ？ 誰のことだい、そりゃ？」

悪い予感的中した。友人の東出も、校医と寸分違わぬことを言う。これはもう偶然ではないのは明らかだった。

「俺と一緒にコンサートに出場した、篠宮麻希だよ」

「はあ？」

東出にもまた「麻希」という名は響かなかった。しかしそんな筈はないのだ。彼には、麻希を紹介して、歌声まで聞かせている。彼女のことを絶賛していたではないか。

その点を質すと、東出は訳が分からないという複雑な表情を浮かべて、

「最初からお前は、一人でギターを弾くって言い出したんだぞ」と言った。

「篠宮麻希という名前に心当たりがない、そう言うんだな？」

雅成は強い調子で確認した。

東出は自信たっぷりに頷いた。

これ以上ここで議論を続けても時間を浪費するだけである。

雅成は、何か大変なことが起きている、そう直感した。何故か分からぬが、自分に残された時間はさほどないような気がした。

行動を起こすなら今しかない、雅成は自分自身に言い聞かせた。どうやら人々の記憶から、麻希の存在が消えてしまっているようだった。彼女がこの学校に居たという事実が消えてしまっている！ そうだ、教室だ。麻希は自分の隣の席に座っていた。あそこなら何らかの証拠が残っていてもおかしくない。

とにかく教室に行こう。

雅成は東出を突き飛ばすようにして、教室への階段を駆け上がった。

教室の扉を開く。中には誰もいなかった。

自分の座席の隣を見た。ここには春からずっと麻希が座っている。机の中を見てみたが何も残されてはいなかった。ここには麻希の居た証拠はない。

雅成は突然ひらめいて、教室の後ろへ駆け出した。慌てて机の角で腰を打ち付けた。しかし痛みを感じている余裕などない。

名簿である。教室の後ろの黒板にクラス名簿が貼り出してあった。提出物をチェックするための一覧表である。

指を這わせて麻希の名前を探す。

しかし驚くべきことに、その指はついに篠宮麻希という名に辿り着けなかった。

雅成は戦慄した。

自分が立っていることも信じられない。麻希の存在がないのであれば、自分の存在は一体何なのか。自分も彼女と同様、みんなから忘れて去られていても不思議ではない。しかしどうやらそうはなっていない。

これは一体どういうことだろう。麻希の存在だけが、この学校から跡形もなく消え去っている。この調子では、おそらく担任や同級生、あるいは麻希をいじめていた女連中でさえ、彼女のことを知らないと言うに違いない。

もう一つ疑問がある。

どうして自分だけが、彼女のことを記憶しているのだろうか。

それも時間の問題かもしれない。とにかく今すぐ行動を起こさなければならぬ。もたもたしている余裕はない。

麻希の自宅に行ってみよう。彼女からは暑中見舞いを貰っていた。それは自分の机の中に、きちんとしまっている。そこに彼女の住所があった筈だ。

背後から黒い霧が自分に迫ってくるような恐怖。それはあらゆる

ものを飲み込んでいる。この先、自分も例外ではない。
もう一刻の猶予はない。

雅成は自宅に向かって駆け出した。

19

麻希、君はどこへ行ってしまったんだ？ 俺を置いていかないでくれ！

雅成の魂が叫ぶ。

このまま君と別れるのは嫌だ。どうしてもっと早く自分の気持ちに気づかなかったのだろうか。

麻希のことが大好きだった筈なのに、自分の感情を押し殺していた。歌の才能を持ち、将来芸能界へ進もうとする彼女が、あまりにも自分とかけ離れた存在に思えた。自分には声を掛ける資格さえないような気がしていた。だから自分の気持ちを素直に伝えることなど、思いもよらなかったのだ。

でも今は違う。

この世の誰よりも麻希のことが好きだ。彼女と自分がどれほど不釣り合いであろうと、そんなことは構わない。

彼女を心から愛している。ただずっと傍に居たい、それだけだった。

雅成は自宅の玄関の扉を乱暴に開くと、靴を脱ぐのももどかしく階段を駆け上がった。

勉強部屋に飛び込む。足がもつれて転びそうになった。

息を切らしながら、机の上を見た。

麻希からの暑中見舞いは、確かに存在していた。雅成は救われた気持ちになった。もしかすると、この葉書も消えてなくなっているのではないかと、心配していたからである。

確かに麻希の手書きの住所が読める。とにかくここへ行こう。そして彼女に会おう。

住所はどうやら電車で数駅先のようだった。いつか麻希と海へ行った路線である。その先に彼女の実家があるらしい。

雅成はタクシーを呼び、駅まで走らせた。

どうしても心が焦る。見えない敵と戦っているようだ。今日中に麻希に会っておかなければ、このまま二度と会えない気がする。

夕方の駅前は学生や会社帰りの人々でごった返していた。その人波をかき分けるようにして、ホームへ上がった。

そう言えば、初夏に麻希の後を追って、このホームに来たことを思い出した。あの時、確かに麻希はここに立って電車を待っていた。それは雅成にはひどく昔の出来事のように感じられた。

混雑した列車に乗り込む。つり革に掴まり、揺れる車両に身を任せて、車窓を眺めた。

街を出て、しばらくすると視界一面に海が広がる。夕日が海まで赤く染めている。打ち寄せる波が、薄いカーテンのようにひらひらと舞った。

麻希と一緒に砂浜を歩いたことを思い出す。彼女は波とたわむれて、長い髪を揺らして踊っていた。

あの姿は、もう見るできないのだろうか。

雅成は列車を降りた。

自分の街の駅と比べると、はるかに小さな駅だった。それでもこの時間、降りる人の数はそこそこ多かった。

駅舎を出ると、すぐ目の前に白いタクシーが停まっていた。雅成はそれに吸い寄せられるように乗り込んだ。葉書の住所を読み上げると、運転手は了解して、すぐさま車をスタートさせた。

麻希には、顔のそっくりな双子の姉がいるという話だった。自宅ではその姉と一緒に暮らしているのだろうか。

そうだった、今思い出した。麻希から双子の姉の存在を聞いた時、

自分は彼女の身体から発せられる不思議な雰囲気は、それで全て説明できるような気がした。顔の見分けがつかないほどよく似た姉が、実は密かに一緒に学校に通っていて、二人は要所要所で交代しながら自分の前に現れているのではないかと考えた。

今回の麻希が消えてしまったのも、それで説明できるのではないだろうか。確信は持てないが、案外自宅に行けば、姉妹二人が自分を迎えてくれるのではないか、そんな気もする。

気づくと、エンジン音がうなり声を上げていた。今タクシーは人気がない坂道を登っているのだった。

車が停まったのは、山の斜面を切り開いて立つマンションの前だった。

雅成は料金を支払うと、エントランスに入った。部屋番号を押すと、ブザーが鳴って、インターホン越しに喋れるようになる。

「どなたですか？」

麻希ではない声がした。母親かもしれない。

「芹沢雅成と申します。麻希さんの同級生です」

「えっ？」

一瞬不穏な空気が流れた。麻希につきまとう不審者とも疑われたか。

しかしおそらく自分の姿は室内からモニターされている筈である。学生服を着た自分は決して怪しい人物には映らないだろう。

雅成はわざと落ち着いた声で、

「麻希さんは帰ってますか？」

と訊いた。

「麻希ですか？」

応対する声の主は、一層怪訝さに包まれているようだった。感嘆とも絶望ともつかぬ複雑な抑揚を感じさせた。

しばらく沈黙の後、

「分かりました。とりあえず、どうぞお上がりください」

エントランスのロックを解錠する音がロビー全体に響き渡った。雅成はエレベーターで目的の階まで上がる。

ドアの前に立った。緊張が一気にピークに達する。麻希は中に居るのだろうか。

呼び鈴を押すと、ドアがゆっくりと開かれた。

そこには中年と思われる女性が優しい物腰で立っていた。これが麻希の母親だろうか。

「初めまして、芹沢雅成です。麻希さんとお会いしたいのですが、それを聞いた女性の顔は、一瞬歪んだように見えた。

いや、それよりも、次に彼女の発した言葉が、雅成を放心させた。この世のありとあらゆる道理が、一瞬に音を立てて崩れ始める。

これまで自分は一体何を根拠に生きてきたのか、激しく頭が混乱した。

その中年の女性は、

「初めまして。私が麻希の双子の姉の麗奈です」と言った。

第十四部

雅成の目の前には、中年の女性が立っていた。狭い廊下で行く手を阻むように立ちはだかっていた。照明がやや逆光になっていて、顔の表情がはっきりと読み取れない。

明らかに自分よりも一回りは上の年齢である。それでも品性の感じられる顔立ちに思える。生きる世代の違う者同士が今、玄関で睨み合っているのだった。

たった今彼女は双子の姉だと名乗った。少なくとも雅成にはそう聞こえた。これは聞き違いだろうか。

「どうぞ、お上がりください」

思考が停止してしまつた雅成を揺り動かす声だった。校医や東出と同じように、まさかこの麗奈という女性も麻希のことを葬り去るつもりだろうか。この世の中で、自分一人だけが騙されている、そんな気分になった。自然と身体が硬くなった。

身内であるはずのこの女性までも、麻希の存在を隠そうとしたら、どう反論すればよいだろうか、雅成は靴を脱ぎながら考えた。

しかし今、雅成に打つ手がないのだった。まずは一刻も早く麻希と再会したい。そのためにはこの女性の言葉に素直に従うしかない。

「こちらへ」

雅成は姉に導かれるまま、中へと進んだ。

そこは暖色の照明が充満する応接間だった。雅成はソファに腰を掛けた。

周りを見回す。ここに麻希が住んでいる筈だ。きっと彼女が暮している証がある。

「ちょうど今コーヒを淹れるところだったの。あなたもいかがですか？」

麗奈は雅成のただならぬ緊張に気づいたのか、わざとのんびりした調子で訊いた。

雅成はそれには何も答えず、麗奈の顔をまじまじと見た。

彼女の顔に麻希の面影が感じ取れる。麻希が歳を重ねていくと、ちょうどこの女性のような顔になりそうだった。麗奈が麻希と血の繋がった家族であることは、どうやら間違いなさそうだった。

しかし二人が双子というのは、まるで納得できない。歳の差という問題がある。もしも麗奈が自分を騙そうとしているつもりならば、まんまとその策略に乗ってはならない。雅成は拳を握りしめた。

「麻希さんはどちらに？」

どんな答えが返ってきてても驚かないという心の準備はできている。

麗奈は笑みを浮かべて、

「残念ながら、妹はここへはもう何年も帰ってきていないのですよ」

と言った。

やはり嘘である。それでは麻希は一体どこに暮しているというのか。毎日どこから学校へ通っているというのか。

なぜ家族である筈の麗奈までも、麻希のことを隠そうとする？

みなで口裏を合わせて、自分を欺こうとしている。それは一体何のために？

自分は悪い夢を見ている。頭の中が濃い霧に包まれているようだった。もはや自分の居る場所も、そして自分がどこへ向かおうとしているのかも分からない。とにかく今は、麻希本人と会うことしか考えられなかった。

「それにしても麻希という名前は、久しぶりに聞いたわ」

麗奈は感慨深げに言った。雅成にはその言葉の意味が分からなかった。

彼女の目には、雅成の顔は映っていないようだった。どこか遠くを見るような目で、懐かしさに身を委ねているふうだった。

「茶化さないで正直に答えて下さい」

雅成はもどかしくなって、ぴしゃりと言った。

麗奈はふと我に返ったように視線を戻すと、静かに答えた。

「もう随分前に、妹は死にました」

麗奈は無感動にそう告げた。それは無責任とも取れる口調だった。雅成は再び言葉を失った。どうして誰も彼も自分と麻希を引き離そうとするのだろうか。二人の再会がそれほど難しいことなのか。つい数時間前までは、麻希とは同じ空間を共有していたではないか。彼女は優しく声を掛けてくれた。手を伸ばせば彼女の頬に触れることだってできた。

雅成は今や絶望の縁に追いやられていた。どうもがいても自分に逃げ場がないように感じられた。もはや返す言葉が見つからない。世界中に麻希の存在を否定されては、どうすることもできない。目の前のこの女性に、自分が望む真実を語らせる方法は何かないものだろうか、雅成は弱り切った身体でただそれだけを考える。

奥のキッチンからポットの沸騰を知らせるメロディーが聞こえてきた。その音に急かされるように雅成は反撃に出た。このままでは心の居場所がない。早く落ち着く先を見つけたかった。

「そんなの嘘だ」

雅成は麗奈ではなく、ほとんど自分に言い聞かせるように叫んだ。麻希の存在を必死に隠すあまり、彼女を死んだことにするなんて、いくらなんでも酷すぎる。例えば姉でも許せなかった。

「僕は今日の昼まで、麻希さんと一緒に居たんです。彼女は死んじやいない。毎日同じ教室で、隣同士、机を並べていたのです」

そうは言ってみたものの、まるで心に晴れ間が見えてこなかった。何故だろう。もはや自分に自信が持てなくなっていた。しかし麻希は確かに自分の目の前に居たのだ。自分はそんな彼女を愛していた。麗奈は顔の表情を少しも変えることなく、黙って雅成の言葉に耳を傾けていた。

「もう少し詳しく聞かせて」

麗奈は静かにそう促した。

雅成は思い出すように語り始めた。

「今年の春、桜並木の下で麻希さんと出会いました。最初、彼女は僕を避けていたようです。いや、僕だけではなく、クラスの誰とも交わろうとしなかった。彼女は教室でいつも孤独でした。そんな彼女を見ていると、どこか自分と同じ境遇のように思えてきて、いつしか彼女のことを気になり始めたんです」

麗奈は一切口を挟まず、頷くように聞いている。

「夏休み前、彼女の歌の才能を知って、文化祭のコンサート一緒に出場しないかと誘いました。学校中に彼女の本当の実力を見せてやりたいと思ったからです。彼女は承諾してくれました。それで自分も不慣れなギターを一生懸命練習しました。

夏休みに入って、彼女の口から、実は歌手デビューするかもしれない、と告げられました。どうやら麻希さん自身は、芸能界に進むかどうか迷っているみたいでした。家族にも相談した、って言うてました」

雅成はそこまで言うのと、麗奈の顔を見た。

「私が何て言うてるか、あなたに話しましたか？」

彼女は強い視線を投げ返してきた。

「両親は賛成しているのに、姉は反対しているってそれを聞いて、彼女は肩を揺らすようにして笑った。

「それで？」

「それで今日がコンサートの日だったのです」

「なるほど、結果はどうだったの？」

麗奈は食い入るように訊いた。

「実は昨日色々あって、麻希さんは風邪を引いてしまったのです。だから、思わしくない結果になりました」

雅成は慎重に言葉を選んだ。麻希が一部の女子から虐められていたこと、タバコを吸っていたこと、今日のステージで倒れたことなどは言わなかった。

「なるほど」

麗奈は短く言うてから、ソファアートを立った。

「ちょっと待っててね」

そう言い残して、彼女は隣の部屋へと消えていった。
そしてしばらくして戻って来た。

「これをどうぞ」

雅成は分厚いアルバムを手渡された。両手で受け取ったが、それはずっしりと重かった。

「コーヒーを淹れてきますので、どうぞごゆっくり」

麗奈がその場を離れると、雅成は手にしたアルバムをそっと開いてみた。

そのアルバムには、ある女性の成長記録が収められていた。
生まれたばかりの双子。二人の赤ん坊は、まるで鏡に全身を映しているようである。どちらが麻希だろうか。

ページを繰る度に、園児、小学生、中学生と二人の娘は成長していく。たまに単独で写った写真もあるが、そのほとんどは二人並んでフレームに収まっていた。

しかし途中から、カメラは片方の少女だけを追うようになった。
背がすらりと高く、髪の長い少女。間違いなかった。彼女は篠宮麻希である。

さらにページをめくると、高校に入学したばかりの写真が待ち受けていた。舞い散る桜の中、校門を背に一人の少女が立っていた。
口を真一文字に結び、じつと正面を見据えている。高校生活に対する期待と不安が入り交じった表情である。

雅成はこの景色に見覚えがあった。これは自分が毎朝通り抜ける校門である。当然後ろに見えるのは雅成の学校であった。
しかしどこか妙である。

麻希の着ている制服に違和感を感じる。そう、違うのだ。この制服は雅成の学校のものではない。

「制服が今と違うでしょ」

知らぬ間に麗奈が盆を持って、すぐ横に立っていた。

それからコーヒークップを二つテーブルに置いた。

まさか、そんなことがあるものか。雅成の前では、彼女はみんなと同じ制服を着ていたではないか。

もう一度写真に目を落とす。この写真は最近のものではないのか。とすれば、麻希が高校へ入学したのはもう何年も前ということになる。麻希は一体何歳なのか？

雅成はアルバムをしっかりと持ち直して、先頭のページまで戻った。最初のページに、この世に生を受けた直後の双子の姿があった。そこに小さく生年月日が添えられていた。

雅成は目を疑った。まるで自分の年号とは一致しない。十年以上の隔たりがあった。

これは一体どうしたことが。麗奈の言う通り、麻希は過去の人なのか。

これは自分の理解を超えている。もはや世の中の理屈は、麻希に關しては通用しないようだった。

言葉が出なかった。では、今日の昼まで一緒にいた、あの少女は誰なのか。

答えを見つけないまま、雅成の手は自然にページを元に戻していた。まだ分厚いアルバムは半分も進んでいない。この先に答えがあるのではないか、すぐるような気持ちだった。

第十五部

高校時代の写真は圧倒的に数が少なかった。

突然、私服姿の麻希が台紙を埋めるようになる。マイクを片手に歌を唄っている写真が一気に押し寄せてきた。

「妹は、高校二年の夏に中退したの。ある音楽プロダクションにスカウトされてね」

いつの間にか雅成のすぐ横に腰掛けていた麗奈が、そう説明した。その言葉を裏付けるかのように、それ以降の写真は全て、華やかに彩られた世界が続く。赤や青、黄色の派手な原色が彼女を引き立てている。これまで彼女を取り囲んでいた自然の色あいがすっかり消えてしまっていた。そこには雅成が考える日常生活とは無縁の、異質の空間が広がっている。

それまで自然体だった麻希も、徐々に一商品として変貌を遂げていくのが分かる。確かに芸能人は商品である。これはもはや個人の記録ではない。スターの生写真が散りばめられた写真集に過ぎない。雅成はどこか寂しい気持ちになった。もう写真の中でしか、彼女とは会えないのだろうか。

しかしそんな中にも、プライベートな写真も貼ってあった。プロダクションの事務所内で撮ったものだろうか、恰幅のよい中年男性と写ったものや、高級料理店で芸能人らしき若い連中と談笑しているものもあった。

アルバムの最後には、麻希のサイン色紙やCDが挟んである。麻希の笑顔が印刷された商品がそこにあった。雅成は複雑な気分になった。果たしてこれは自分のよく知っている麻希なのだろうか。それともまるで違った人格を持つ麻希なのだろうか。

CDジャケットには、「紀美山紫乃」という文字が躍っていた。しかしそれは雅成にとって何も響かない芸名だった。やはり自分にとって、麻希は麻希でしかない。

「それね、『きみやましの』って読むの。『しのみやまき』という文字をバラバラに並び替えたものなの」

雅成は複雑な気分でアルバムを閉じた。

麻希はどうやら、この麗奈と双子の姉妹であることに間違いない。そして彼女は高校を中退して芸能界へ進んだ。ここまではよい。問題は、自分の目の前に現れた麻希である。彼女は一体何者なのか？

「紀美山紫乃さんはどうなったのですか？」

雅成はようやくそんな質問を発した。今はとにかく手がかりが必要だった。麻希についてどんなことでも知りたいと思った。

「妹が芸能人として成功したか、ってこと？」

確かにそれも知りたい。だが一番の興味は、彼女が今どこに居るのかということである。しかしそれを説明するのが少々面倒に思われて、雅成はそのまま頷いて見せた。

「デビューしたての頃はちよつとはチャホヤされたんだと思う。

誰だって最初は物珍しいものだから。でも、あの程度の歌唱力では、所詮芸能界では生き残れないのだと思う。売れるには、むしろ才能よりも個性的なキャラクターが必要じゃないかしら。妹のように引っ込み思案で、人目を気にするような性格では駄目。人を押し分けてでも、自分を強烈にアピールするような、そんな図々しさが必要だと思う。とにかく自分を他人より目立たせて、売り込むことが大事なの。

そんなの妹には無理だったのよ。姉の私にはよく分かっていた。

だから私は最後まで妹の芸能界入りには反対してた」

麗奈の軽いため息が漏れた。

「麻希さんが死んだって、本当なんですか？」

「さつきは勢いでそんなこと言ったけど、姉としてはもちろん信じたくはないのよ」

その言葉に雅成の心が動いた。やはり彼女は死んではいない。絶望が希望に変わる瞬間。彼女は生きている。そうだ、大事なことを忘れかけていた。今日まで学校生活を一緒に過ごしてきたではない

か。

「妹は芸能界で行き詰まって、相当悩んでいたみたい。どんどん仕事も減って、終いには自分の存在価値すら見い出せなくなっていたのだと思う。それで、ある時突然失踪したのよ」

「失踪？」

「そう、行方不明。事務所の方からも何度も連絡があつたけど、ここには戻ってきててないの。事務所の意向で、紀美山紫乃は芸能界を引退したことになる。その方がどちらにも傷がつかなくていいらしいのね。でも、結局事務所は売れない歌手を一人芸能界から葬り去つただけのこと。

後から聞いた話では、同じ事務所の無名タレントと駆け落ちしたという噂もあつたみたいだけど、真偽の程は分からない。売れない者同士、どこか知らない町で密かに暮しているのかもしれないし、一緒に自殺したのかもしれない」

雅成には言葉もなかった。

「でもバカよね、あの子。一人で悩んだりせず、姉の私に相談してくれればよかったのに」

いつしか麗奈は涙声になっていた。

雅成はうつむいて一人考えた。

そういうことなら、麻希は自ら命を絶っているのかも知れない。自分の知っている麻希は、実は亡霊に過ぎなかったのだ。

麻希の姿は幻覚だったということか。それにしても雅成には信じることなど、到底できなかった。

麻希は確かに生きていた。髪を揺らして笑う顔や、歌う時の真剣な眼差しは、雅成の目の前にはつきりと存在していた。手を伸ばせば、彼女の温もりに触れ、重ね合わせた小さな唇も、しつとりと潤っていた。

やはり麻希は自分にとって、現実だったのだ。
いや、それだけではない。教師や生徒らにも彼女の姿は見えてい

た。

死んでからも、麻希には人並みの高校生活を過ごしたいという強い願望があった。芸能界を急ぐあまり、経験できなかった高校時代を手に入れたかった。芸能界で挫折を味わい、自暴自棄になった時、置き忘れてきた普通の生活への憧れは、より一層強くなったことは想像に難くない。

その強い願いが、彼女の魂に命を吹き込んだのかもしれない。

春、新学期に合わせるように、麻希は二年生のクラスに降り立った。偶然にも自分の隣の席に座ることになり、彼女の高校生活が始まった。そして今日、突然学校を去った。同時に人々の記憶からも消えていった。

麻希は二度目の高校生活をどんな気持ちで過ごしていたのだろう。今日のコンサートでの失敗が、芸能界での挫折と重なり合ったのかもしれない。それが第二の高校生活に幕を引くきっかけになったのだろうか。

姉の言う通りだと思う。麻希はバカだ。どうしても一人で悩んでるんだ？

その昔、双子の姉がそうであったように、今度は自分が助けあげられた筈である。どうしても心の内を明かしてくれなかったのだろう。

ああ、そうか、やっと今、思い至った。麻希にとって自分は頼りない存在だった。二度目の高校生活も、自分のような弱い人間ではなく、もっと強い人間が登場して、彼女を成功に導いてやるべきだった。

虐められ、無視され、自分の得意とする歌さえも聞かせることができなかった麻希。結局、そんな彼女を助けてやれなかった。

雅成の目には、自然と涙が湧いた。

（ごめんな、麻希。力になれなくて）

静かな応接間には、麗奈と雅成の涙をすすする音だけが響いていた。

第十六部

どれだけ時間が経ったのだろう。

雅成は涙を拭って、ソファを立った。

麗奈ももう泣いてはいなかった。

「それじゃ、そろそろ帰ります」

「そうですか、せっかく来て頂いたのに、何のお構いもできなくて」

麗奈の目は赤く腫れ上がっていた。それを見られたくないのか、顔を少し逸らすように言った。

今日、久しぶりに麻希のことを思い出して、昔のように泣いたのかもしれない。麗奈は妹がいなくても、しっかりと生きている。深い悲しみはすでに乗り越えているのだろう。

「お姉さん、どうか気を落とさないでください。僕も麻希さんはどこかで無事に生きているような気がします」

雅成はそう言っておいて、それはあながち嘘ではないのかもしれない、と思った。現実世界にあれほど鮮明な姿を見せることができるなら、いつかひょっこり姉に会いに来て不思議ではない。

「今日はありがとう。麻希のことを聞けて嬉しかったです」

「こちらこそ、ありがとうございました。麻希さんには大変お世話になりました。彼女がお帰りになったら、同級生の芹沢雅成が感謝していた、とお伝え下さい」

そう口にしながら、雅成は不思議な気分にとらわれた。麻希と年齢のかけ離れた自分が、一緒に高校生活を送っていたという話に、麗奈は何の疑問も感じないのだろうか。

いや、長い間妹を待ち続けた麗奈にとっては、麻希の身に何が起きようとも、全てを受け止める心の準備があるのかもしれない。

雅成は玄関のドアを開けた。

外はすっかり夜のとばりが下りていた。

ひどく足取りが重い。ここまで何をしに来たのだろうか。姿なき麻希を追ってきた。彼女はこの世に存在しないのだった。

山坂道を月明かりを頼りに下っていった。見上げると、大きな満月が輝いていた。

駅まで時間を掛けて歩いた。駅にはすっかり人気はない。薄暗い待合所で一人列車を待った。雅成の他に、誰の姿もなかった。

ついに麻希とは会うことができなかった。おそらく彼女は二度と姿を現すことはないだろう。雅成はそう自分に言い聞かせながらも、諦めきれない気持だった。

待合所には扉がないので、容赦なく虫の音が入ってくる。人がいないと知ってか、我が物顔で大合唱をしている。いつの間にか、雅成はすっかりその鳴き声に包囲されてしまった。

麻希のことを考えてみる。彼女は今、どこで何をしているのだろうか。

意味もなく、雅成は狭い待合所をぐるりと見回してみた。ここで強く念じれば、ひょっとすると麻希が現れるのではないか、そんな気になった。雅成の口元は自然と緩んだ。

彼女と再会したら、何と言ってやろうか。

まずは、文句の一つでも言ってやらねばなるまい。姉を心配させるだけでは飽き足らず、自分までも心配させやがった。

でもそれ以上に、麻希には謝るべきだろう。もっと楽しい高校生活を演出してやりたかった。それには自分の力は遠く及ばなかった。隣の席の自分には荷が重すぎたのだ。

どこか遠くで汽笛が鳴った。自分の乗る列車だろうか。いや、待てよ。

突然、雅成の頭に閃光が走った。

自分は何か考え違いをしていないか。ずっと違和感を感じていたことがある。今までそれが何であるか分からなかった。

そもそも新学期に、どうして隣の席が一つ空いていたのだろうか。

この点がどうもしっくりこなかった。

偶然空いていたその席に、篠宮麻希が滑り込んできた。それがきっかけで彼女と出会うことができた。そう信じて疑わなかった。

しかし思えば、それは変ではないか。

なぜなら、麻希がその姿を自由に出現させられる存在なのだとしたら、何もわざわざ空いている席を探す必要はない。我々人間とは違って、彼女は偶然を超越できる世界にいるからだ。とすれば、教室の誰の横に座ろうと、それは彼女の自由ではないのか。

つまり麻希の立場からすれば、出会う相手は意図的に選べたことになる。座席は偶然に空いていたのではない。麻希が自ら用意したのだ。彼女は数ある生徒の中から、この自分を選んだ。

それには、一体どんな意味があるのだろうか。

雅成は春の自分を思い出していた。

時が流れるまま、無気力に生きていた。心に自由のない、まるで奴隷のように高校生活を送っていた。人を愛することも、また愛されることもない日々を過ごしていた。

そんな一生徒の前に、篠宮麻希は降り立った。

彼女との出会いが、自分にわずかな希望と勇気を与えてくれた。

彼女の存在が、毎日の生活に活力を与えていた。ギターの特訓をして、彼女の才能に少しでも追いついたと実感した時、自信がみなぎった。

そこで初めて、麻希を愛する権利を得たように思えた。麻希を心から愛した。同時にそれは、生まれて初めて人を愛した瞬間だった。彼女はかけがえのない存在となった。

そうか、麻希は自分の生き方を変えるためにこの世に来てくれた。間違いない。彼女の目的は、自分を助けることだったのではない。麻希は自分を選んでくれた。学校で最も駄目な後輩に目をつけてくれた、か。

雅成は一人声を出して笑った。

（麻希、ありがとう。君のおかげで僕は変わった。もう大丈夫だ。

心からお礼を言うよ)

ホームに列車が入って来た。この駅を出る最終列車である。

雅成は足取りも軽く、飛び乗った。

時刻はもうすぐ午前零時を迎えようとしていた。長かった一日もどうやら終わりを告げている。

雅成は列車に揺られていた。

この時間、車内に乗客の姿はほとんどない。つり革だけが一斉に同じ方向へ揺れて、その存在を主張していた。

それにしても今日は大変な一日だった。昨夜はよく眠れなかったせいもある。今になって疲労感が身体中を包み込んでいた。

ちよつと気を許せば、すぐさま深い眠りに落ちそうだ。雅成は小刻みに頭を振った。

それにしても、今日のコンサートは失敗だった。もしこれが成功を収めていたら、麻希はこんなふうに学校生活に終止符を打たなくて済んだのだろうか。

彼女は前日に風邪を引いたことが原因で、実力が発揮できなかった。体調さえ崩さなければ、全てはうまくいったのだろうか。

雅成は考えを先へ進めようとした。しかし霧の中を歩いているような感覚しか得られない。先へ進んでいるのか、それとも同じ場所を巡っているのか、それさえ分からなくなる。

どこか妙な具合である。自分も風邪を引いたのだろうか。列車に乗った辺りから、ひどく体調が悪くなったように思える。

もう一度真剣に考えてみよう、身体に力をこめる。

麻希はこの世の存在ではなかった。人間を超越した彼女が、失敗をやらかすことなんてあるのだろうか。

いや、そうではなく、彼女は最初からコンサートで失敗する運命だったとは考えられないか。どう転んでも、別の人生を歩むことなどできなかった。例え風邪を引かなくても、何らかの違う要因が彼女の成功を阻んだことは十分に考えられる。いずれにせよ、彼女に

は学校を再び去る運命だけが用意されていたのだ。

麻希はそうなることを知らなかったのだろうか。それとも最初からそれを承知していたのだろうか。

駄目だ、頭の中で霧がますます深くなってきた。もう立ち止まるしかない。自分がどちらの方向を向いているのかも分からない。下手に動けば、思考の縁から転落してしまいそうだ。

早く眠りにつきたいと思う。そうすれば、この不安感から一気に解放されるだろうか。

そうしている間にも、雅成の頭の中には、次々と疑問が湧いてきた。答えを見つめるより先に、新たな疑問が幾重にも重なる。

どうして自分は列車に乗っているのだろうか。この騒音が安眠を妨害する元凶なのだ。早く列車を降りてしまいたい。

さっきまで誰かと話をしていた気がする。もう遠い昔のように思える。相手は誰だったのか、さっぱり思い出せない。とても大事な内容だった気がする。

そうだ、麻希だ。

雅成はやつとのことだと思い出した。

彼女の姿が遙か遠くになっている。どれだけ目を凝らしても、顔の輪郭さえ滲んでいる。

いや、そんなことよりも今は眠りたい。とにかく身体を休めたい。

雅成は薄目を開けて腕時計を見た。もう数分で午前零時だ。

ああ、そうか。

時間だ、時間のせいだと気がついた。

麻希の存在が消えかかっているのだ。先生や同級生の記憶から出ていったように、彼女は今、自分の中からも立ち去ろうとしている。このままでは忘却の勢いに身体が流されてしまいそうだ。何とかしないと。

雅成は学生服の胸ポケットから、生徒手帳を取り出すのももどかしく、真っ白なページを一枚はぎ取った。

もう時間がない。

揺れる車内で、鉛筆を走らせた。

「篠宮麻希が好き。麻希を忘れない、忘れたくない」

目を見開くと、窓から漆黒の海が見える。

そうだ、いつか彼女と一緒に来た海だ。

まもなく列車はあの海に停まる。

もう一度しっかりと海を見た。彼女があの波の中であつて踊っている。

駄目だ、強く意識を持たないと、自分が消滅してしまう予感がする。大切な宝物を、誰かに取られるのではないかという恐怖感に襲われる。

列車は海に見えるホームに滑り込んだ。

雅成はふらふらと座席を立った。ここで降りなければならない。

列車を降りて、駅舎を出ると海まで向かった。一度来た道である。足が覚えていた。

誰もいない砂浜が開けた。波が寄せては返す音だけが耳に突き刺さる。

なぜ、ここに来た？

確か、誰かに会ったためだった。それは誰だったのか？

その人はここで待っているような気がした。しかしそれは思い違いだったか。

頭が朦朧とする。許されるのなら、このまま砂浜に倒れてしまいたい。

海辺には誰もいない。会うべき人もここにはいない。そもそも誰に会おうとしていたのか、それさえ思い出せない。どうやら場所を間違えたらしい。待ち合わせ場所はここではなかった。

ああ、今思い出した。

待ち合わせ場所は学校の体育館ではなかったか？

確か体育館の裏手に階段があった。下からは見えない所に、その人はいつも座っていた。

きつとそうだ。どうしてそんな所に座っているのか、いつも不思議に思っていた。どうしてもつと早く思い出せなかったのか。

これから学校の体育館まではどうやって行けばいいのか。それはこの砂漠から、何千里も離れた場所のように感じる。

しかも今降りたのが最終列車なのである。こんな場所でタクシーも捕まるとは思えない。

時間切れだ。今度ばかりはしくじった。

その人はきつと今も、そこで待っている筈なんだ。でも、もう間に合わない。

雅成は忌々しげに時計を覗き込んだ。

時計の針は午前零時ちょうどを指していた。

霧が晴れてくる。身体が楽になる予感がする。もうこれで何も悩まなくても済むのか。

全てを忘れて…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9847g/>

無言の歌よ、響けあの日の大空に

2011年12月1日17時51分発行